

春の日の花と輝く

辻本久美子

人物

森下美緒

女学生 後に画家

神谷るり

医学生 後に医師

牧田弓子

「ミモザ」の居候 後に画家

川原千重

「ミモザ」の店主

宇津木早苗

「ミモザ」の近所の主婦

シン

「ミモザ」のピアニスト

新庄真裕美

美緒の娘

美術館の展示室。

薄暗い中、中央に掛けられた2枚の絵。その横に立つ、老齡の学芸員。

真裕美 では、少々ご説明申し上げます。

間。

真裕美 右は、ご覧の通り、中国大陆での戦争を描いた作品「上海」、一般に言われる戦争画です。作者は森下美緒。美術史的にはほとんど語られることのない画家です。一方、左は、牧田弓子の、非常に若い頃の作品「蒼いひと」です。ご存知のように、牧田弓子は、独自の美を追求した孤高の画家です。この2人の女性画家が、昭和の10年代後半に交友関係を結んでいたことは、今回初めて、この展示で明らかにされています。

間。

真裕美 日本が戦争に向かって行ったあの時代に、若い2人の女性画家は、何を想い、何を見つめて絵と向かい合っていたのか、彼女たちの周囲にどんな人々がいたのか。昭和、平成から令和となった今、現代を生きる皆様に少しでも考えて頂けたらと思います、この展覧会を企画致しました。

光が、一瞬、2枚の絵を照らし出し、消える。絵の後方の紗幕が上がる。

昭和11年2月。東京。『画材・骨董・喫茶 ミモザ』

上手に、大小様々な骨董品や画材を陳列する棚。その少し奥に小ぶりのアップライトピアノ。中央に縦長の窓。その横手奥から下手にかけて、カウンターと小さなソファアが数席並ぶ。下手が店の出入り口になっている。

ピアノに向かって、シヨパンを弾いている青年・シン。

奥の住まい部分から、寒そうに手をこすり合わせて姿を現す店主の千重。

シン、急に曲調を変える。流行歌『国境の町』。シンを横目で見て苦笑する千重。

千重 やめな。余計に寒くなるよ。そんな歌。

シン、微笑みを浮かべて、『春の日の花と輝く』を弾き始める。それに合わせて、小さく口ずさみながらストーブに当たる千重。

千重 どうするかね。この雪じゃ誰も来やしないし、今日は閉めるか。

千重、閉店の札を手にして、入り口のドアを開けようとするが、開かない。

取っ手を引っ張り、開かないドアと格闘する千重。

様子を見に近づくシン。突然開くドア。反動で後ろによろける千重。とっさに支えるシン。

ドアからなだれ込む少女2人、美緒と弓子。

千重 美緒ちゃん！びっくりするじゃないか。

少女2人を助け起こす千重。奥から手拭いを持って来て、美緒と弓子に渡すシン。

千重 (弓子を見て) ん？珍しい。友達？

美緒 知らない子。すぐそこで転んで雪に埋まってたの。手を貸そうとしたら払われて、こっちが溝にズボッ。とんだ目に遭ったわ。

弓子 すみません。いきなり手が目の前に出て来て、びっくりして。

美緒 だからって、何もあんなに突き飛ばさなくても。

弓子 : 東京は怖い人ばかりやって言うから…。

美緒 は？怖い？私が？

千重 確かに。怖いよ。美緒ちゃん。

美緒 ひどい。千重さん。

千重 (弓子に) どこから？

弓子 あ、：大阪：です。

千重 わざわざこんな日に。

弓子 びっくりしました。東京で、こんなに降るんですね。うちの方も雪の多い年あるけど、こんなには…。

美緒 50年ぶりだって。今年は凄いわ。

千重 とにかく、2人とも、こっちであつたまつて。そのままじゃ風邪ひくよ。

千重、弓子をストックの前に促す。弓子、足元がふらつき、その場にうづくまる。

千重 大丈夫？

弓子の腹の虫がグウと鳴る。顔をおおう弓子。

千重 …お腹すいてるの？

弓子 …昨日から、…何も食べてないんで。

千重 大阪を出て来たの、…いつ？

弓子 …昨日の朝。

美緒 夕べはどこに？

弓子 …上野駅で。

千重 今朝は、市電動いてなかったんじゃないのかい？

弓子 そやから歩いて。

美緒 駅からここまで、この雪の中？

千重 とにかく、何か作るから、ちよつと、そこで休んでなさい。

千重、弓子をソファ席に座らせる。

千重 どこまで歩くつもりだったの？

ストーブに温まりながら、コートのポケットから紙片を取り出す美緒。

美緒 (読んで) — 「画材・骨董・喫茶 ミモザ」 樋村亮介。

カウンターで料理をしている千重、顔を上げる。紙片を弓子に返す美緒。

美緒 言ったでしょ。ここだって。

弓子 すみません。ほんまに。

美緒 私って、そんなに信用ならない顔？

笑う千重。むっとふくれる美緒。

千重 (弓子に) 樋村、あの人が？ここに来たって？

うなづく弓子。

千重 いつのこと？

弓子 去年です。9月。

美緒 この頃おじさん見かけないけど、また、いつもの放浪？

千重 そう。今日はいずこの空の下……ってね。で、行く先々で、気になる若い子に声をかけて、東京に出てこないかって。女衞じゃあるまいし。

美緒 この子じゃ無理。せめてシンぐらいでないと。ね。

カウンターで料理を手伝っていたシン、奥の裏口からゴミ捨てに出る。

千重 あの子は違うよ。

美緒 そうよね。シンはピアノの腕一本。(弓子に) 君は？日本画？油彩？彫刻？樋村のおじさんに誘われたからには、それなりに見込まれたんでしょ。

弓子 神社の境内で写生をしました。絵具がなかったんで、草や実の汁を絞って色を付けてたら、あの、樋村さん……が通りかかって。

美緒 草や実の汁？面白い。どんな色になるんだろ。

弓子 なかなか思う色は出ません。絵具を買えないから、しょうがなしに……。

美緒 あ。そういうことね。それで、おじさんが絵具を？

弓子 そんなに絵が描きたいなら、東京に出てこないかって。これ渡されて。美緒 それだけで？信用したの？さっきは、あんなに私の事疑ってたくせに。

弓子　：出たかったんです。家を。あんなとこ、少しでも早く。

千重　旅費は？あの人が出したの？

弓子　いえ。：貸してくれるって言わりましたが、断りました。

美緒　じゃ、どうやって。絵具代もなかったのに？

うつむく弓子。

千重、カウンターから出てきて、弓子の前にサンドイッチとミルクを置く。目を見張る弓子。

美緒　あ、急にお腹すいてきた。千重さーん。

千重　わかってる。あんたの分もあるよ。

美緒　メルシー。

カウンターに行き、サンドイッチをつまむ美緒。戸惑っている弓子。

美緒　千重さんのサンドイッチは格別よ。ほら。遠慮しないで。

手を合わせ、ひとつまみを口に入れる弓子、次の瞬間、次から次に口に放り込む。アツという間に食べきってしまう弓子。あつけにとられる2人。

美緒 そんなにお腹すいてたの。

弓子 こんなおいしいもん、初めて食べました。これがパン……ですか？

美緒 大阪でしょ？パンも食べたことないの？

弓子 ……うちは、大阪の、……ずっと南の山の中で……。

シン、ドアを開けて、後ずさるように入って来る。

店に入る大柄の若い女・るり。

栗色の髪とその美貌で、明らかに混血とわかる。その怒りの形相に、一同身構える。るり、傘を握りしめ床に突き立てる。店内を見回するり。

るり 出て来い！大崎三郎！隠れるとは卑怯なり。出て来い！尋常に勝負せよ！

千重 あの。

るり (千重をにらみつけ) この店の女将か。

千重 女将はないでしょうよ。マダムならともかく。

るり では、マダム。

千重 そんな年増じゃありません。川原千重と申します。

るり 面倒な人だ。

千重 面倒はそちらでしょ。何ですか。見れば、うら若い娘さんがいきなり、物騒な言葉で。若かろうが年寄りだろうが、卑怯な輩にはこれ位の勢いで物言わねばなりません。

千重 卑怯な輩？誰の事です。

るり 大崎三郎。美校の学生です。

美緒 大崎……。え？三郎？

るり 知ってるのか？仲間か？

美緒 仲間って。まあ、よく会うグループの…。

美緒の首元に傘の柄を突き付けるるり。

るり 貴様！女のくせにあんな卑怯な輩とつるんで…！許せん！

美緒 何なのよ！あんた！私が何をしたって…？

るり 美校の奴らなんぞ、どうせ、女の裸ばかりを描いて喜んでる卑しい最低の人種だと思っていたが、女もそこに加担していたとは！世も末だ。

千重 聞き捨てなりませんね。

千重を見るるり。

千重 確かに芸術家は、裸も描きますよ。人間は裸にしないと作りがわかりませんからね。着物の上からは見えないもの、それを描く。それだけのことを卑しいと言われちゃあねえ。

美緒 そうよ。人間の裸は美しい。美しいものを描いて何が悪いの。卑しいっていうのは、それを見る者の

心根。卑しい人間が見るから、卑しくなるのよつ。
るり 私の心根が卑しいと言うのか！

ソファにうづくまり、口を押さえて青ざめている弓子、えずき始める。

千重 どうしたの？…気分悪いの？

美緒 わ、吐くなら、御不浄に…。

シン、あわててバケツを持ってくる。バケツに吐く弓子。後ずさる美緒。

るり (千重に) 手拭いと水を。

慌てて用意する千重。コートを脱ぐるり。

美緒 食当たり？…ええ？私、食べたわよ。さつき。

千重 よしとくれ。そんなことあるわけないだろ。

美緒 ひよつとして、あれ？

自分の腹部の前に大きく手を動かす美緒。たしなめる千重。るり、顔をしかめてバケツの中を確

認し、弓子にコップの水を促す。

るり 口をゆすいで。今は飲まずに出しなさい。ちょっと横になって。

るり、弓子をソファに寝かせ、脈を取る。バケツを提げて奥に行くシン。

るり 食べたのは、パンとミルク？

千重 あ、はい。サンドイッチを。

るり 食べて間がない？他には？

千重 何も。(弓子に) 昨日から食べてないって言ってたよね。

弓子 …ほんまは、4日前からです。

驚く一同。

るり それだね。空っぽの胃袋に急に入れ過ぎて、拒絶反応を起こした。いきなりサンドイッチは厳しかつ

たね。重湯ぐらいから徐々に慣らして、お粥にしないと。

千重 そうと知ってれば。

弓子 すみません…。

美緒 え？(るりに) お医者さん…？

るり まだ医者ではありません。女子医専の学生です。

千重 どうりで。

美緒 医専の学生が何なの。さっきのあれは。

きつと美緒を睨むるり。

るり 大崎三郎の仲間だと言いましたね。

美緒 ここで画材を買いに来て知り合って、数人で油彩画のグループを作った。それだけ。その大崎さんが、何したっての。

言い淀むるり。

美緒 どうせ、付文よこしたとか、後つけられたとかって言いがかりでしょ。ちよつと目立つからって、自己意識過剰な子が思い込む。よくある話。

るり 失敬な！

るりに迫られて後ずさる美緒。

千重 美緒ちゃん！（るりに）そちらも、すぐかっとならないで。そんなこっちや、いい医者になれませんよ。

ほら、これでも飲んで。

るりに紅茶のカップを差し出す千重。その香りに、はっと我に返ったようにカウター席に腰掛けるるり。一礼して、カップを手に取り、口をつける。

るり …失礼しました。私は女子医専1年の神谷るりと申します。

千重 るり…さん。綺麗なお名前。名は体を表すって言うけど。

美緒 中身は表してないってか。

千重 それは、あんたも似たり寄ったり。

美緒 ひどくい。千重さん。

千重 (るりに) 大崎さん。うちの常連さんだけど、とても真面目な人ですよ。女の人を付け回すとか、付文とか、そんなことするような人じゃありません。何があっただんですか？

るり …裸体画を描いたと。

美緒 それのどこが悪いのよ。

るり …私の…。

驚く2人。

千重 モデルになったんですか？

るり なってない！そんな破廉恥なことを、誰が！

美緒 じゃ、どうして。

千重 …想像で描かれた…と。

美緒 おお。やるね。奴さん。

千重 大崎さんだろ？…人物画なんか描くかね？昆虫にしか興味がないって聞いたよ。

美緒 わかんないよ。このるりさんが巨大な昆虫に見えたのかも。

美緒をたしなめる千重。

千重 その絵を、見たんですか？

るり、首を横に振る。

美緒 じゃ、話に聞いただけ？

千重 誰から？

るり …美校で噂になってると、複数の知人が。

千重 噂…。

立ち上がるるり。

るり 大崎三郎は、よくここでたむろしていると聞きました。いつ現れますか。

美緒 さあ。大体、いつも山下君とか小川さんと一緒に。水曜日に来ることが多いかな。

るり 水曜日…。わかりました。では。

千重 間違い…。ということもありますよ。

るり 私は聞きました。確かな情報です。

千重 本当に？

るり どういう意味です。

千重 よくわかりませんが、…例えば、誰かが、あなたをからかってとか。

るり …からかわれそうな風体だと。

千重 そんなこと言ってますよ。

シヨパンが静かに流れ出す。

いつの間にか、ピアノの前に坐って演奏をしているシン。ピアノの方に目をやる一同。

弓子、るりを盗み見るようにしながら、風呂敷包みから取り出した紙に鉛筆で何かを描いている。

コートを手取るるり、弓子に目を留める。びくつとして紙を後ろ手に隠す弓子。

るり (弓子に) 胃が落ち着いたら、水分を取って、それから消化のいいものを。

ためらいつつ頭を下げる弓子。

るり (千重に) ご馳走様でした。お幾らですか。

千重 要りませんよ。その子を診てもらったんだし。もうこんな騒ぎはよしとくれ。

コートを羽織り、ちらとシンに目をやりつつ出て行くるり。

店内に流れるシヨパンの優しいメロデー。

美緒、弓子が隠した紙に目を留め、それを取り上げる。

弓子 あ…。

美緒 これ、今、描いたの？

千重 (横から覗き) …あの人？神谷…るりさんかい？

うなづく弓子。

千重 へえ。大したもんだ。

美緒、弓子の風呂敷包みを勝手に開ける。慌てる弓子に目もくれず、反故紙の束をぱらぱらと開

いて見て、その絵に圧倒されている美緒。いきなりその束を放り投げ、カウンター席に坐る。

何も言わず、美緒の前に紅茶を出す千重。

千重 (弓子に) 見てもいいかい？

戸惑いながらうなづく弓子。反故紙の束を繰って、ゆっくり見始める千重。ぼんやり空(くう)を見つめている美緒。シンのピアノが流れている。

舞台は暗くなり、ピアノの周囲だけが仄明るい。

無心にピアノを弾き続けるシン。

窓の外、降る雪。

シン、ピアノの蓋を閉じると、その上に突っ伏して眠る。

やがて明るくなる周囲。

3日後。

中央奥の住まいの方から店に入って来る弓子。

ピアノの前で眠っているシンに気づき、奥から毛布を持って来ると、シンの肩にそっと掛ける。シンの寝顔を見ていた弓子、そばにあった紙片を取り、鉛筆でシンを描き始める。

窓の外、降りしきる雪。

ドアを開ける気配がして、咄嗟に紙片を側の棚の中に隠す弓子。

開かないドア。慌ててドアの前に行き取っ手を引っ張る弓子、その反動で、後ろ向きに転ぶ。

雪まみれになって入って来る美緒。

美緒 ああ、ひどい目に遭った。どうなってるの。この雪は。

転んでいる弓子を見ても気にせずコートのを雪を払っている美緒。

美緒 千重さんは？

弓子 すぐそこまで。ご近所さんに、りんごのおすそ分けを。

美緒 あ、今年も来たんだ。信州りんご。楽しみ。りんごジャムのサンドイッチ。あ、お腹は、治った？

弓子 はい。最初、千重さんがお粥を作ってくれはって。昨日の夜は、もう普通のご飯を。

美緒 それはよかった。君、え…と。

弓子 牧田弓子です。

美緒 そう。弓ちゃん。この前、話が途中になったけど、どうしてここに来ようと思ったの？

弓子 それは、樋村さんに誘われて。

美緒 あのおじさん、そんなに魅力的だった？

弓子 え。

美緒 そっか。東京から来たおじさんは、ちよつといい感じに見えたか。

首を横に振る弓子。

美緒 冗談。弓ちゃんの絵に、おじさんが一目ぼれしたんだよね。

弓子 …家を出たかったんです。

美緒 お父さんお母さんは反対しなかったの？ひとりで、知らない都会に出るなんて。

弓子 お父ちゃんもお母ちゃんもいません。台風で死にました。：私は、伯母さんとお荷物でした。いなくなつてせいせいしてると思います。

気まずそうに、弓子から目をそらす美緒。

ピアノの側で眠っていたシン、目をさまし、かけられた毛布を取ると弓子に手渡す。軽く頭を下げ、奥に消えるシン。

美緒 へえ。あの人見知りのシンが、もう打ち解けたんだ。たった3日で。

弓子 でも、まだ何も話してくれません。

笑う美緒。きよとんとする弓子。

美緒 千重さんに聞かなかつた？シンはね、喋れないの。

弓子 ：ああ。返事がなくても、気にしないでって、そういうことやつたんですか…。

美緒 大正の大震災で孤児になつて、それから声が出なくなつたらしい。横浜のいかわしい店でピアノを弾いてたところを、ここのおじさんが見つけて、連れて帰つて来たんだつて。人を寄せ付けなくてさ、おじさんと千重さんの言うことはよく聞くけど、他の人には全然。私たちみたいな常連客とも、めつたに目を合わせないし。：綺麗な子だけど、きっと、大変な目に遭つてきたんだらうね。

ピアノを見つめる弓子。

力づくでドアを押し入って来るるり。

思わず身構える美緒。るり、ぜいぜい言いながら傘の柄にもたれかかって立つ。

美緒 お、大崎さんなら、まだ来てないわよっ！

るり わかつてる。

息を整えてから、頭を下げるるり。

るり 先日は、失礼を致しました。誠に申し訳なかった。この通りです。

きよとんとしている2人。

るり 女将…ではなく、マダム…でもなく。…千重さん…は。

美緒 (弓子を見て) すぐそこ…まで？

るり ご不在なら致し方ない。改めて伺います。

るり、一礼をして帰ろうとする。

美緒 ちよつと待った。さんざん大騒動を起こしておいて、ごめんなさい、さようならはないでしょ。何がどうなのか、説明しなさいよ。大崎さんの疑いは晴れたの？

るり 大崎三郎は2人いました。美校の油彩画と、もう一人は大洋画学校の日本画に。

美緒 じゃ、君の裸体画を描いたのは、その大洋画学校の日本画の？

るり 言葉に出して言わないで頂きたい。聞くだけで、おぞましい。

美緒 とにかく、犯人は美校の大崎さんじゃなかった…と。

るり そういうことです。

美緒 だと思った。昆虫しか描けない小心者に、裸体画なんて描く度胸あるわけない。巨大な昆虫と間違え

たんならともかく。

るり …巨大な昆虫。うまいことを言うものだ。

美緒 そうでしょ。

美緒をたしなめるように袖を引っ張り、首をかしげる弓子。

るり どうせ異形の者です。

美緒 異形？

るり 慣れているつもりだった。言いたい奴には言わせておけばいいと。この凶体で、この髪、この目の色。しかし、それを、自分の知らぬところで、ただ女として、女の体とだけ見なされて、貶められていたとは。それが悔しくて、情けなくて…。

傘を床に突き立てて、唇をかみしめるり。

るり
失敬。

出て行こうとするり。

美緒 その絵を見たの？

るり 見るものか。目の前で焼き捨てさせた。

美緒 行ったの？その、もう一人の大崎さんに会いに。

るり 懲らしめてやりました。今度やったら、その指を折って二度と絵筆を持ってなくすると。

美緒 こわ…。

るり もっと悪質な奴かと思ったら、案外簡単に降参した。所詮軟弱な絵描きだ。

美緒 何よ。所詮つて。そうやって、絵描きをよく知りもせず、絵描き全部を貶める。それは、君自身が、絵描きに偏見を持つてるから。君の言う、女の裸を描いて女を貶める男つてのと、どう違うの。

はっと気づくるり。

美緒 第一医者なら裸なんか見飽きてるはずでしょ。何をそんなに大騒ぎしてんだか。

美緒を睨みつけるるり。

美緒 最初っから、周囲を下に見てるよね。医者の方が偉いのよ。まだ卵のくせしてるり 何だと！

るり、美緒に近づく。急に口を開く弓子。

弓子 綺麗なものを、描きたかった…！

弓子を見る2人。

弓子 …んやと、…思います。…その人。綺麗な人を見かけて、ただ、それを描きたかった。それだけやっ
たんと違うかな…て。

間。

弓子 …その絵が、かわいそう…。ちゃんと見てもらえんと、焼き捨てられて…。

カウンター席に坐る美緒。

美緒 私は見たわよ。弓ちゃんの絵。

弓子 え？

美緒 描いてたじゃない。この間。この人の絵。

真っ赤になってうつむく弓子。るり、血相を変えて弓子に詰め寄る。

るり 何だって！

弓子 ご、ごめんなさい！

るり とんでもない奴らだ！一体、君たちは！

美緒 顔だけよ。

るり …顔？

美緒 だから自意識過剰だったの。その体を描こうなんて酔狂、そうはいないでしょ。
るり いちいち言うことが気に障る奴だ！

美緒 (弓子に) 見せてあげたら？

うつむいて首を横に振る弓子。

美緒 もったいつけんじゃないわ。ほら。

美緒、カウンターの端の棚から、一枚の紙片を取り出し、るりに突き付ける。
取り返そうとする弓子。それをからかうように、紙片を持つ手を高く上げる美緒。
その手から紙片を取り上げたるり、じっと絵を見る。うつむく弓子。

美緒 …綺麗な絵でしょ？

るり、無表情のまま、絵を弓子に返す。

るり 君も、美術学校に入るのか。

必死に首を横に振る弓子。

美緒 どれほど腕があっても、美校には入れない。女子には資格がない。

るり 女子美術学校があるだろう。

美緒 女子美に入ったって、結局女は、腕一本で生きていけないの。絵なんてせいぜいお嬢さんの手すさび。

嫁入り道具。女は家でいい妻いい母に収まってろってことよ。

弓子 学校なんか、とんでもない。ここで働かせてもろて、絵を描けたら、私はそれだけで。

美緒 まあ、とりあえずは、ここで巨大な昆虫でもモデルに腕を磨くことね。そうしたら、どこか向こうから絵を買いたいなんてお大尽が現れるかも。

るり 私は、二度とここには来ない。

美緒 あら、千重さんに挨拶に来るんですよ。

るり それがすめば、もう。

美緒 このサンドイッチおいしいのよ。この間は紅茶しか飲まなかったでしょ。次回ぜひ。

奥から出て来るシン、ピアノの前に坐る。

るり、ふとシンに目をやるが、そのままドアを引いて出ようとする。

いきなりドアが開いて、駆け込んで来る千重。その反動で、後ろにのけぞるるり。るりの背後に

いた弓子が転ぶ。

千重 ちよつと、大変！おや、あんた達来てたの。

るり 先日はご無礼を…。

千重 (無視して) 赤坂の辺りで軍人さん達が集まって、物騒なことになってるって！

美緒 何かあったの？

千重 詳しくはわかんないんだけど、(声をひそめ) 政府の偉い人達が襲われたんじゃないかって噂が。

驚く一同。

美緒 偉い人達？総理大臣とか？

るり 襲ったのは誰なんです。

千重 それが、陸軍の軍人さん達。つまり、クーデターじゃないかって。

驚く美緒とるり、シン。訳が分からず首をかしげる弓子。

千重 そのこの角の稲川さん。ご亭主が、今朝早く仕事で赤坂に行ったのに、お得意さんの会社に入れなかったって、さつき帰って来て、教えてくれたの。とにかくあちこちに銃剣持った軍人さん達が見張りに立ってて、あのあたり一帯近づけないんだって。

顔を見合わせる一同。

千重 何だか物騒な世の中になって来たね。おお寒い。

屋根から雪の落ちる音。びくっとする一同。

暗転。

昭和13年。3月。『ミモザ』店内。

ピアノを弾いているシン。

カウンターで食器を洗う千重。

上手奥で大きな物音。

千重 弓ちゃん？

上手の棚の裏からふらふらになって出て来る上っ張り姿の弓子。

千重 まだ描いてたのかい？てつきり部屋に戻ったかと思ってた。

弓子 すみません。…あ、もうこんな時間…。お店…。

千重 いいよ。ちよつと向こうで寝ておいで。そんななりで出られても困るよ。

弓子 すみません…。

千重 シン、部屋に連れて行っておやり。

シン、弓子に肩を貸してやろうとするが、あわてて離れる弓子。

弓子 あ、絵具がつくから。

コソコソと奥に消える弓子。

千重 すぐ根を詰めるね。あの子は。大したもんだけど、こっちが心配させられ通しだよ。

シン、またピアノに向かう。

そつとドアを開けて店に入って来る着物姿の女、早苗。片足をわずかに引きずって、おどおどと店内を見回している。

千重 いらつしやいませ。

早苗 あの、どこでもいいんですか？

千重 どうぞ。

早苗、壁際のソファ席に腰をおろす。グラスに水を注いで早苗の前に置く千重。

千重 何になさいますか？

早苗 …あの、こ、紅茶を。

千重 かしこまりました。

早苗、周囲を見回して落ち着かない様子。

千重 よかったら、そちらの陳列棚でもご覧になって下さい。掘り出し物もあるかと。

早苗、初めて気が付いたように、立って、棚の商品を見る。

早苗 あら、綺麗…。舶来品ですか？

千重 あるじがよく上海に買い付けに出かけますのでね。半分道楽みたいなものですけど。

早苗 ご主人…？

千重 いえ、…まあ、そんなようなね。

苦笑する千重につられて微笑む早苗、壁に飾られた絵に目を留める。

千重 それは、日本製です。うちに出入りしている若い絵描き達の作品。

早苗 そうなんですか。

千重 そっちは、うちに住み込んでる子が描いたんです。まだ若い女の子なんですけどね。去年、新人の公募展で入選して。なかなか有望なんですよ。

早苗 女の子が…。凄いですね。

千重 向こうの、色の鮮やかな。それも女学校に行ってる子が描いたんですよ。

早苗 そうなんですか…。あ、もしかして、半月ほど前の取り締まり騒動の…？

千重 ご存知でしたか？

早苗 実は、あの時お店の前まで来たんです。入ろうとしたらあの騒ぎでもうびっくりして。

千重 あら、それは、失礼致しました。申し訳ありませんでしたね。

早苗 あの学生さん達は…。

千重 いえ、そんな子達じゃないんですよ。男女関係なく、いつもここに集まっては美術の話ばかりして

る至極真面目な学生達で。ま、たまには羽目を外してバカなことやってますけど、逮捕されるような不良は一人もいません。この辺りの飲食店一斉にサボ学生を取り締められて、お上のお達しが出たってんですけど。うちは、この通りお酒も出していない純喫茶。なのに、何を勘違いされたか踏み込まれちゃまって、ほんといい迷惑。

早苗 そうだったんですか。

紅茶を早苗に出す千重。

千重 どうぞ。

早苗 頂きます。(飲んで) いい香り。おいしい…。

千重 お口に合って、ようございました。

早苗 英国製…ですか？

千重 ええ。よくわかりに。

早苗 上海で？

千重 え？…はい。

早苗 向こうは英国製のもが手に入りやすいんでしょうね。

千重 知り合いが融通してくれるようで、こうして、ちよいちよい店でお出しする分には。

早苗 だんだん外国製のもが手に入りにくくなってますものね。

千重 …まあ、そうですね。…お近くにお住まいですか？

早苗 はい。その角の、稲川さんのお向かいに。

千重 ああ、年明けに引っ越してこられた？

早苗 はい。ご挨拶が遅れました。宇津木と申します。

千重 宇津木さん。：新婚さんだとか。

早苗 お恥ずかしい。私は初めてですが、宅は再婚なんです。

千重 あ、そうでしたか。余計なことを：、すみませんね。

早苗 いえ。慣れない町で、知り合いもなく不安で。買い物に行くのに、いつもこの前を通るんですが、

：喫茶店に一人で入るなんて、とても勇気がなくて。でも、：（シンをちらと見て）時々聴こえてくるピ

アノの演奏がとても心地よい音で、ずっと気になって。

千重 あら、それは光栄ですこと。シン、ほめて下さったよ。

シン、ちらと振り向いて会釈をしながら、演奏を続けている。

千重 すみませんね。不愛想で。

けたたましくドアを開けて入って来る美緒。

美緒 ほんとなの！弓ちゃんが青風展に出すって！

千重 何。騒々しいね。大丈夫だったのかい？お家の方。謹慎は解けたの？

美緒 そんなことどうだっていい！弓ちゃんは？
千重 寝てるよ。ついさっきまで描いてたから。

美緒、無言で奥のアトリエに姿を消すが、すぐ後ずさって出て来る。

美緒 これがそうなの？これを出すのね？…どうしてサロメなの！これは私が先に描いたモチーフよ！どうして、弓ちゃんが！しかも、青風展には、私が出品するって言ったのよ。私がまだ描き上げてないのに、これ、どうということよ！

千重 あんたは、この間のことでご両親から謹慎を食らってたんだろ。

美緒 だからって、友達の盗作をしていいって言うの？人を出し抜くの？

千重 悔しかったら、美緒ちゃんも完成させればいいじゃないか。

美緒、千重を見つめる。

千重 不良学生と間違われて逮捕されて、叱られて家に閉じ込められてたって、描こうと思えば描けたはず。

あんた、絵は家に持って帰ってたんだろ。締め切りが来週だって、自分で言ってたじゃないか。

美緒 そうよ。だから。

千重 誰が何を描こうと自由。弓ちゃんが、美緒ちゃんの絵を見て触発されたからって、それを描いちゃいけないってことにはならないと、私は思うよ。

美緒 千重さん、弓ちゃんの肩持つの？

千重 そういうことじゃないだろ。

美緒 そういうことでしょ！千重さんは、弓ちゃんの味方なんだ！どうせ私なんか！

千重 子供じゃあるまいし、みっともない。（早苗に）すみませんね。

早苗 いえ。：私、何だか、今、とてもドキドキして。

千重 申し訳ありません。

早苗 違うんです。その、：同じ女なのに、こんなに真剣に、熱くなつて議論ができるなんて。：私みたい

に、主人の言いなりになっている者とは、全然違うんですね。

千重 違いませんよ。その気になれば、誰だって。

千重を見る早苗。

いきなり店に入って来るるり。顔が青ざめている。

美緒 るりさん！ちよつと聞いてよ。弓ちゃんが！

るり （無視して千重に）紅茶を。

千重 はい。いつものね。

るり 他のだつたらいららないから。

千重 わかつてるよ。

カウンター席に腰掛けるるり。

美緒 るりさん！

るり 何。大きな声出さないで。今日はちよつと気分悪いんだから。

千重 珍しい。医者の不養生？

るり 今日ばかりはね、医者之道を選んだことを後悔しそうに……。君らにこんなこと言ってもしょうがないか。

早苗 …お医者様？

千重 まだ卵ですけどね。

早苗 ますます凄いですね。この方達…。

美緒 (るりに) 弓ちゃんが、私の描こうとしてたモチーフを盗んだの！
るり で？

美緒 青風展に出すつもりだったの！

るり だから？

美緒 だから、…どう思う？友達に盗作されたのよ？

るり 同じものを、そっくりそのまま？

千重 同じ題材、サロメを描いたってだけだよ。構図も色合いも全然違う。

るり じゃ、盗作とは言わない。

美緒 でも、あの子は、私が描いてること知ってて、それなのに！

るり 負けるのが怖い？

はっとする美緒。

るり 相手が何をどう描こうと、君は君の作品を描けばいい。それだけのことでしようが。

るりに紅茶を出す千重。

千重 サンドイッチは？

慌てて首を横に振るるり。憤慨した様子で奥の部屋に入っていく美緒。

千重 美緒ちゃん。

奥から聞こえる美緒の悲鳴。驚く一同。

慌てて飛び出して来る美緒と入れ違いに、奥の部屋に入るシン。

千重 どうしたの？

美緒 ゆ、弓ちゃんが、血だらけで！

ふらりと姿を現す弓子、シンに脇を支えられている。

千重 弓ちゃん！大丈夫？

弓子に駆け寄ろうとしたるり、弓子の顔や手に付いた赤い色を見て、怯む。

弓子 あ…。どうしたんですか。美緒さん、お家からお許し出たん…。

弓子、ふらついてシンに支えられていることに気づき、あわててその手を離す。

美緒 るりさん！早く診て！

るり (後ずさって) 無理。今日はダメ。

千重 何言ってるの！弓ちゃん、どこをケガしたの？

弓子 え？どこも。

美緒 どこもって、そんなに血が！

早苗 あ、あの、お医者さん、呼んで来ませうか。

千重 すみません。お願いします。

立ち上がりかける早苗。

シン、弓子の手に付いた赤い色の匂いを嗅いでみて、ふっと微笑む。不思議そうな一同。
シン、弓子の手を千重の鼻先に持って行く。匂いを嗅ぐ千重。

千重 ……何？薬臭い…。

弓子 あ…。すんません。サロメの指に、どういう風に血が付くかと思て。

美緒 ……ヨカナーンの首の血…？

弓子 ナイフで切ってみよかと思たけど。

千重 やめて。

弓子 はい。痛そうなんで、やめました。で、赤チンをたらししてみようとしたんやけど。ちよつとのつもり
が、えらいこぼれてしもて。

千重 おどかさないどくれよ！ほんとにもう！

ほっとする一同。椅子に坐り込む美緒。

美緒 びっくりさせないでよ。…私がどなったからかと思つたじゃないの。

弓子 え？何のことですか？

千重 さっき、聞こえなかったかい？

きよとんとする弓子。

美緒 いいよ。もう。

弓子 すんません。サロメの指の血のことで頭いっぱい。

千重 美緒ちゃんに一応謝ったら？美緒ちゃんがサロメを描いてること知ってたんだろ？

うなづく弓子。

千重 それを青風展に出すつもりだったってことも。

わけがわからない弓子。

美緒 …もういい。

出て行こうとする美緒。

弓子 あ…、ありがとうございました。

弓子を見る一同。

弓子 美緒さんの作品を見て、絵の構想が湧いたんで。実は、何を描こうか迷ってたから。は……。 (美緒に) 君の負け。勝負は最初からついてた。

首をかしげる弓子。苦笑する千重。髪をくしゃくしゃにかき上げる美緒。

るり とにかく、それ、早く洗って来なさいよ。見てるだけで気持ち悪い。

弓子 あ、はい。

千重 どうしたの？るりさん。今日、何か変だわね。

美緒 …あ、わかった。

るり 言わないで！

千重、一瞬考えて、口を開く。声を合わせる美緒。

美緒・千重 解剖実習！

るり 言わないでって！

弓子 解剖実習で、人間の体を実際に切って中を見るんですよね。見学できませんか？

目をむくるり。

千重 あんた、見る勇氣あるのかい？

弓子 はい。中身がわかったら、体の形が描きやすくなるかもしれんし。

弓子を見る一同。

千重 (美緒に) やっぱり、勝てないよ。この子には。

美緒 私にも紅茶！サンドイッチも。分厚いハム入れて。
るり やめてっば！

笑う千重。

早苗 凄いですね。本当にこの方達…。

千重 お騒がせしました。

鳴る電話。出る千重。

千重 はい。画材と骨董の店、喫茶ミモザです。

美緒 長いよね。どれが本業やら。

弓子 おじさんのこだわりなんやそうです。

美緒 まあ、だんだん画材が手に入れにくくなってから、ここは助かるけど。弓ちゃんは、いいよね。おじさんの秘蔵っ子だから。画材も使いたい放題で。

弓子 はい。ありがたいと思っております。

美緒 あゝあ。どうしてこう、人の気持ちに鈍感なんだか。

るり 美緒ちゃんもいい勝負だけどね。

美緒 そんなところで互角でも嬉しくない。才能が欲しい！余は羨ましいぞよ。

きよとんとしている弓子。

電話を置く千重。顔が蒼ざめている。

美緒 千重さん？

千重 店閉めなきや。

美緒 えゝ？サンドイッチは？

千重 それどこじゃないんだ。シン。

シン、ピアノの蓋を閉める。立ち上がる早苗。

早苗 あ、それじゃ、お代を。

千重 相済みませんね。またおいで下さい。

早苗、財布から小銭を出して支払い、店を出る。ちらと千重を見る早苗。

るり (千重に) どうしたの？

千重 : 樋村が、特高に連れて行かれたって。

驚く一同。

美緒 おじさん、何したの？

るり 今、どこに？

千重 品川署だって。いつもの画材の仕入れ先からいきなり。

弓子 特高て？

美緒 特別高等警察。アカの取り締まり。

弓子 おじさん、アカなんですか？

美緒 そんなわけない。何かの間違いよ。この間の私と一緒に。

身支度をする千重。

千重 今から行って様子を聞いてくる。みんな、悪いけど、今日は。

うなずいて帰り支度をする一同。

千重 (シンに) あと頼んだよ。

うなずくシン。

千重 弓ちゃん、絵に夢中なのはいいけど、そのストーブ気をつけて。

弓子 あ、はい。

るり 千重さんも、気をつけて。

千重 ありがとう。

店を出る美緒とるり。下手に歩き出す2人。

下りる紗幕。その前の街路。下手から上手へと歩く2人。

美緒 何があつたんだろ。おじさんみたいな人が捕まるなんて、おかしい。

るり 最近、いろいろ取り締まりが厳しくなってるからね。樋村氏のように、芸術の庇護者は、若者に影響力が大きいから、目を付けられやすいのかも。

美緒 そうか。だから、私までこの間みたいな目にあつたんだ。ああ、思い出したら、また腹が立ってきた！
るり あれは、美緒ちゃんもちよつと言い過ぎた。

美緒 どうしてよ。何も悪いことなんかしてないのに、いきなり大勢で入って来て、女のくせに男とつるんで、いかがわしい絵なんぞ描いてるとか言われたのよ？

るり それを言われると耳が痛い。

美緒 まあ、るりさんも最初はそんなこと言ってたか。だけど、あいつら、サロメも知らないんだもの。警察なんて、芸術のゲの字もわからない連中ばかり。自分らの目が濁ってるから、そんな風にしか見えな
いんだ！

るり それを口に出すから。

美緒 何がいけないのよ。ほんとのこと言って捕まるなんて、おかしいじゃないの！

るり シナとの戦争が始まってから、周囲がやたら窮屈になった。だんだん空気が淀んで来てる。このまま
変な方向に行かなきゃいいけど。

美緒 そうかな。南京も陥落したし、近衛さんも威勢がいいじゃないの。以後、国民政府を対手（あいて）
とせず！

皮肉な笑みで美緒を見るるり。

るり 君みたい人が多いよね。：罪のない罪びと。

美緒 何よ。私が何の罪を犯したって？

るり いや。失敬。失言だ。

美緒 ひっかかるな。

るり 気にしないで。

美緒 るりさんって、いつもそうだよね。高みから人を見下ろしてる。そりゃ、お医者様だから。って言うより、混血だから？所詮、私らとは違うんだよね。

るり 違うよ。違って当たり前。

美緒 ほら。

るり …君達みたいなら、どれだけ気が楽だったか。

美緒 それ。そういうところが。

るり、何か言おうとして、店の外に立っていた早苗に気づき、口をつぐむ。

るり やめよう。こんな話。

美緒 何よ。気抜けするなあ。いつもは、どんどん反撃して来るくせに。

るり そんな気分じゃない。

美緒 解剖実習がそんなに。

るり 違うよ。さっきの電話のこと。

美緒 そうか…。そうだね。ごめん。こんな時だもんね。私も、イライラしちゃって。

早苗、あわてて姿を消す。見ているるり。

美緒 あのお客さん？見ない顔だよね。
るり 千重さんと親しそうに喋ってたけど。

北風が吹きつける。

美緒 寒う。もう3月も半ばなのに。

肩をすくめて下手に消える2人。

紗幕が上がる。3日後。『ミモザ』店内。

ソファでうたた寝をしている弓子、店のドアを叩く音で目覚める。
寝ぼけた顔で、ドアの鍵をあける弓子。入って来る美緒、るり。

美緒 帰って来た？おじさん。

弓子 いえ。

るり (中を覗き) 千重さんは？

弓子 それが、夕べ遅くに帰って来て。

美緒 夕べ？あれから、ずっと留守だったの？

弓子 おじさんの面会に行ったら、取調室に呼ばれて、そのまま2日間帰されんと。
美緒 ひどおい！ 大丈夫なの？千重さん。

弓子 何かえらい目に遭いはったみたいなんやけど、私らには何も言うてくれんです。
るり シンは？

奥から出て来るシン。2人に会釈すると、ピアノの前に坐る。

るり (シンに) どうなの。千重さん。

うなだれて首を横に振るシン。

るり 上がるよ。

奥に消えるるり。ピアノを弾き出すシン。

美緒 弓ちゃん、サロメは？

弓子 一応、仕上げました。

美緒 こんなにいろいろあったのに、絵に集中できたの？

弓子 描き出したら、忘れてしまうんで。

美緒 私には無理。結局、あれから全然筆が進まなかったもん。

上手奥のアトリエに入る美緒。

美緒 何よ。これ。

あくびをする弓子。後ずさって出て来る美緒。

美緒 完敗だわ。は、笑うしかない。…これが弓ちゃんの絵。誰の真似でもない、弓ちゃんにしか描けない美の世界。出なさい。これ。青風展に。特選間違いなしだ。

弓子 いいんですか？この間はあるに怒ってはったのに。

美緒 はなから勝負にならない相手と、喧嘩なんかしようがなかったってことよ。やだやだ。ひとり騒いだ自分がばかみたい。

首をかしげている弓子。

奥から出て来るるり。

美緒 どうだった？千重さん。寝てるの？

るり (弓子に) 耳は、いつから？

弓子 帰って来はった時から、耳鳴りがひどい言うてはって。夜遅くに起きて来はった時には、何も聴こえてへんみたいで。

るり シンのピアノも…？

うなづくシン。

美緒 殴られたの？特高に！

るり 外傷はない。

美緒 じゃ、どうして。

るり 極端な衝撃に遭って、耳が聴こえなくなることがある。心因性の失聴。

美緒 やっぱり、殴られたんだ。ひどい！じゃ、おじさんも。

るり ひどい目に遭っているか、そんな目に遭うと脅されたか…。

美緒 許せない！警察は、おじさん達に無実の罪をかぶせようとしてるんだ。

弓子 治るんですか？千重さんの耳。

るり 治ることもあるし、治らないこともある。人間の心は複雑だからね。

美緒 おじさんが帰って来たら、治るかもしれない？

るり 一度特高にいらまれたら、そう簡単には。

美緒 何とかならないの？

弓子 誰かに頼むとか。

美緒 誰か…って誰。

弓子 さあ。

美緒 特高にも顔の利く、誰か。女学校の先生：はだめか。うちの親は一介の銀行員だし。

弓子 お店のお客さんは？

美緒 ここには貧乏学生か、アカと間違われる画家の卵しか来やしない。：ああ、どうしてこんな時役に立つ人脈がないんだ。

考え込む2人。

るり、意を決したようにカウンター横に行き、電話をかける。

見つめる一同。るり、急に作り声を出す。

るり もしもし。お父様？わたくしです。はい。：え、今ちよつとお友達の所に寄せて頂いていますの。はい。もう少ししたら帰りますわ。お父様、ちよつと急にお願いたいことがございまして。：特別高等警察の方にお話を通して頂けないかしら。：実は、3日前から品川署に引き留められている方がいらつしやるんです。：違うわ。間違いなの。：そうなんです。樋村亮介様と仰います。はい。骨董や画材のお店を経営していらつしやる。わたくしのお友達のお知り合いの方です。：近衛のおじ様ならきいて下さるんじゃないくて？：はい。それは、もう。はい。：ありがとうございます。：はい。ごめんあそばせ。

るり、電話を切る。あつけにとられている一同。バツの悪そうなるり。

るり 何よ。

首を横に振る一同。

るり たぶん、これで大丈夫。明日には解放されるはず。

拍手をする美緒につられて、手を叩く弓子。

るり やめてよ。こういうの、ほんと嫌。親に借りは作りたくない。

美緒 凄い。るりさんて、何者なの？近衛のおじ様って、あの近衛首相？

弓子 …首相って、偉い人なんですか？

美緒 内閣総理大臣！近衛秀麿！例の、国民政府を相手とせず！

るり 父がね、若い頃、アメリカ留学中に知り合ったんだって。私が小さい頃は、家にもよくいらしてたの。

今は、お忙しくてそんなこともなくなったけど。

美緒 びっくりすることばかり。

るり ああ。ほんと嫌。こういうのは、私の信条に反する。

弓子 ようわからんけど、おじさん、帰って来られるんですね。ありがとうございます。

るり 君にお礼を言われるのも変。

弓子 おじさんは、私の恩人。私がここでこうして絵を描けるのは、おじさんのおかげです。

シン、るりの前に行き、頭を下げる。

るり やめてっば。シンまで。

美緒 うん。るりさん、見直した。

るり ということは、今までどう見てたの。

美緒 それは、まあ、お高く止まってちよつと嫌味かなって。

弓子 美緒さん。正直に言い過ぎです。

るり そっちの方が傷つく。

弓子 あ、ごめんなさい。すんません。

一同、大笑いする。

シン、ピアノの前に坐る。『春の日の花と輝く』のメロデー。口ずさむ美緒。歌を知らない弓子に、美緒が歌詞を呟いて教える。

美緒 ほら、るりさんも。

首を横に振るるり。

美緒 あ、もしかして、音痴？

むつとするるり、躊躇しつつ歌い出す。美しいソプラノ。驚く一同。

大声で歌う乙女らに、明るい真昼の光が窓から差し込んでいる。

ピアノを弾き続けるシンだけを残して暗くなる周囲。

曲はノクターンに変わる。

その日の夜。

奥から疲れ果てた表情で出て来る千重。気づいて、手を止めるシン。

千重 弾いてたのかい？

うなづくシンを見つめ、耳を押える千重。

千重 何も聴こえやしない。は…。情けないねえ。

カウンターに行き、水を飲む千重。

千重 これでもね、いろいろ修羅場をくぐって来たつもりでいた。まさか、自分がこんなにやわだったとはね。たかが刑事に、ちよつと脅されたぐらいで、この有様。(自嘲気味に) こんなにあの人に参ってたなんて、自分でもわかんなかったよ。…樋村亮介。

微笑むシン。千重、アトリエを覗く。

千重 おやおや。あの子は、またこんなところで寝ちまったのかい。

側にあつた毛布をシンから受け取り、寝込んでいる弓子にかけてやる千重。

千重 大阪のずっと南の山奥だつて。そんな所からよく一人で出て来たもんだ。この子も、あの人の磁力に引かれてここまで来ちまったんだね。

千重に茶を入れるシン。湯呑を受け取る千重。

千重 ありがとうよ。

小さく首を横に振るシン。

千重 あんたも、だろ？あんたも、あの人に魅かれて、それで、ここに来たんだろ。

小首をかしげつつ微笑むシン。

千重 知ってたよ。あんた、声が出ないなんて、嘘だろ。喋ると日本人じゃないってことがばれるから、それで声が出ないふりをしてた。

千重を見つめるシン。

千重 あの人じゃないよ。あの人は余計なことは一切言わない。女の勘さ。…聞きたかったね。あんたが、どんな声でさえざるのか。あの人の前で、どんな風が変わるのか。

シンの鋭い視線に頬をゆるめる千重。

千重 は…。冗談だよ。自分の声が聴こえないと、結構なことまで言えるもんだ。怖い怖い。

間。

千重 弾いておくれよ。あんたの、本当に弾きたい曲を。どうせ、こっちは聴こえないんだ。

ピアノに向かうシン。

千重 あの人、明日には帰されるはずだって、るりさんは教えてくれたけど、本当かねえ。何だか、もう二度と会えないような気がしてならないんだけどね。

ピアノを弾き出すシン。後ろ向きになっていて、シンの顔は、千重には見えない。

シン …二度と会えないのは、私。

中国訛りのある日本語で喋り出すシン。千重には一切聴こえていない。

シン 私、明日、故郷に、…中国に帰る。

千重 あの人に初めて会ったのはね、こんな春の宵だったんだ。桜の蕾も膨らみ始めて。

シン 亮介が捕まった。今度は私。上海での活動が知られないうちに逃げる。もう日本にいる意味、なくなつた。

千重 (髪に手をやり) 私はまだこんな桃割れを結ってさ、ほんの14だった。

シン 千重さんには、世話になった。お礼を言う。

千重 あの人も若くて、白い背広がまぶしいくらい似合つてて、…そりゃあ、映画スタアみたいに綺麗な目をしてたよ。

シン …でも、あんたも、亮介も、日本人。…あの子らも、日本人。

千重 その目に吸い込まれそうになつちまったんだ。

シン 私の国を、侵略している日本人。

千重 美しいもの、綺麗なものだけを求めていたあの目。それに魅かれた私。…夢だったね。

シン 自分の国を救う。それが、私の務め。夢だ。

千重 もう一度、あの頃に戻りたいねえ。

窓の外を見つめる千重、耳に手をやり寂しく首を振る。

千重 あんたのピアノ、もう一度聴ける日が来るんだろうかね。
シン 二度とない。これが最後だ。

ゆつくりと立ち上がり、シンの肩に手を置く千重。

千重 おやすみ。

のろのろと奥に姿を消す千重。

弾くのをやめて立ち上がるシン。

アトリエで物音がする。

ビクツとしてアトリエを覗くシン、驚いたように後ずさる。

毛布を抱えて出て来る弓子。見つめ合う2人。

弓子 ほんまに？

固まっているシン。

弓子 ほんまに出て行くんですか？
シン いつから聞いてた…。

弓子 ……すんません。

顔をそむけたシン、ピアノの蓋を閉め、部屋から出て行こうとする。

弓子 待つて！

シン、踵を返し、弓子の服の襟元を両手で掴む。

シン 誰にも言うな。

シンを見つめる弓子。シン、両手に力をこめ、弓子の首を絞め上げようとする。

弓子 ……言わへん。絶対に、誰にも言わへんから、……その代わりに……。絵を。……絵を描かして。シンさんの顔を、シンさんの体を…。

シン 何を…。

弓子 描きたい。あんたを。あんたの全部を…。

シン 聞いてただろ。私は、君らを裏切ってた。

弓子 私も、嘘ついてた。

間。

弓子 2年前、東京に出て来た時、：私は、伯母さん達を見捨てたんや。：あの日、凄い地震があつて、伯母さんは柱の下敷きになった。伯父さんも従兄妹達もケガして動かれへん。助けてていう悲鳴があつちこつちで聞こえる中、どさくさに紛れて：私は、伯母さんの財布からお金を抜き取って、：逃げて逃げて、大阪駅までたどり着いて、そのまま東京行きの汽車に乗った。

驚くシン。

弓子 シンさんは、大正の大震災で、みなしごになつたて聞いて、ああ、私とは違うんやて。：ずっとシンさんに申し訳ないと思うてた。

シン 結局お互いさまだった：つてことか。

弓子 どっちでも構へん。あんたが、みなしごでも、そうでのうても。日本人でも、志那人でも：。

手の力をゆるめるシン。

弓子 私は、あんたを描きたいんや。ただそれだけや。

シン どうして。

弓子 綺麗やから。私は、綺麗なもんが描きたい。描きたいんや。

まっすぐにシンを見つめている弓子。

シン …時間が無い。

弓子 30分、ううん、15分。

あわててアトリエからスケッチブックを持ってくる弓子、シンの前に立ち、構図を考え始める。呆然としているシンの胸元に手を伸ばし、ボタンを外そうとする弓子。抵抗しかけたシン、弓子の手を払い、自分でボタンを外し始める。それを素早くスケッチする弓子。

暗くなる室内。

浮かび上がるシンのシルエット。

2年後。昭和15年11月。

『ミモザ』店内。

ピアノを弾いている千重。

声を出して歌っているのは『春の日の花と輝く』だが、ピアノの音は時々外れている。

店に入って来る早苗、微笑んでその光景を見ている。

歌い終えて、ふと振り向く千重。

千重 いやだね。聞かれちゃった。

早苗、千重の真正面に行き、拍手をすると、ゆっくりと喋る。

早苗 珍しい。千重さんの弾き語りなんて。初めて聴きました。

千重 久しぶりに歌ったよ。変だったよね。

早苗 お上手ですよ。とつても。

千重 自分の声が自分で聴こえないのには、もう慣れちゃったけど、歌となると別だわね。音程が合ってるかも全然わからない。は…、情けない話。

早苗 歌は素晴らしかったですよ。

千重 シンがね、よく歌ってたんだ。この歌。

早苗 …私がここに來始めてすぐいなくなっちゃった、あの綺麗な男の子ですか？

千重 どこでどうしてるんだか。

早苗 口がきけなかったんですってね。美緒ちゃん達から聞きました。

千重 今になって、少しはわかったような気がする。あの子がどんなもどかしい毎日を過ごしていたのか。

早苗 でも、千重さんは、こうして、相手の唇を読むから、お喋りもできるし。

千重 気が塞ぐとね、何もかも億劫で、人の唇の動きなんか読む気にならないんだよ。

目をそらす早苗。

千重 …そうだった。あの日だったんだよね。早苗さんと初めて会ったのは。

早苗 え？あ、はい。

千重 早苗さんの声もどんなだったか、もう忘れかけてる。

早苗 私の声なんか、いいです。忘れてもらっても。

千重 あの日……。うちの人が特高に捕まって。

早苗 ああ。……そうでしたね。

千重 もう2年か。早いもんだね。せっかくるりさんの口利きで釈放されたつてのに、あのバカ、ここに帰つてこないでさ、何で上海くんだりまで行つちまったんだか。

早苗 千重さんに迷惑かけたくなかった……からじゃないですか？

千重 半年以上経つて、いきなり上海で死んだなんて知らせもらう方が、よっぽど迷惑だよ。

早苗 羨ましい……。亡くなった後も、旦那様の事そんなに想えるなんて。

千重 旦那じゃないよ。あの人は……。いや、旦那……だったね。そういう意味の。

早苗 ……そうだったんですか。

千重 早苗さんこそ、れっきとしたいいご亭主がいるじゃないの。

早苗 そう見えますか？

間。

早苗 貧乏な農家の末っ子で、何の取柄もなくて、その上この足。

左足をさする早苗。

早苗 母親の再婚相手に折檻されたんです。私なんて、あんな年寄りの後添いになるしか生きる方法がなかったんですよ。

千重 ご亭主、40歳なんですよ。年寄りはいあんまりだよ。お気の毒。

千重に背を向ける早苗。

早苗 十分年寄りよ。あいつは亭主じゃないわ。ご主人様。私は言いなりになるしかない召使い。言いつけられたら、知り合いだって売る。友達だって裏切る。

聞こえない千重。皮肉な笑みを浮かべ、千重の方に向き直る早苗。

早苗 ここ、もう喫茶はやってないんですか？

千重 統制統制で、食材は何も手に入らなくなっちゃったからね。

早苗 残念。久しぶりにおいしい紅茶を頂こうと思ってたのに。

ふと思いついたようにいたずらっぽく笑みを浮かべる千重、奥のアトリエに向かって大声を出す。

千重 そろそろ休憩するかい？

るりの声 賛成！

弓子の声 あきません。まだです。動かんといて。

るりの声 いい加減にしてよお。

弓子の声 動くな！

るりの声 …はい。

早苗 (どきつとして) え？2人ともいたの？

千重、カウンターの下からコーヒー豆の包みを取り出す。

千重 るりさん、捕まっちゃまったんだよ。弓ちゃんに。

千重、コーヒー豆を挽き出す。香りに気づく早苗。

早苗 コーヒー？まだあったんですか？

千重 これが最後。この間見つけたんだよ。その下の貯蔵庫の奥に。いつ置いたんだか覚えがないんだけど

ね。ひよつとすると何年も前かもしれないから、味の保証はできないけど。(豆の中から小さな紙片を見つけない) 何。これ。…中国語？

はつとする早苗。千重、紙片を紙袋と一緒に横に置く。
店に入って来る美緒。

美緒 (香りに気づき) あ。千重さん。私がないのに、とつときを飲んじやうつもり？

千重 かぎつけて来たね。え？美緒ちゃん、そんなにコーヒー好きだった？

美緒 ないとなると飲みたくなる。

千重 天邪鬼だね。

美緒 千重さん、いつからそんなに冷たくなったのよ。

千重 美緒ちゃんこそ、この頃僻みっばいよ。

肩を落とし、ソファに座る美緒。

早苗 この間言ってた絵は？仕上がったの？

美緒 訊かないで。

千重、早苗に目で合図する。黙ってカウンターの椅子に座る早苗。

美緒 何よ。聞きたくないの？

早苗 訊かないでって。

美緒 額面通り受け取らなくても。

千重 (コーヒーを淹れながら早苗に) 面倒なんだよ。この子。

美緒 何よ。

千重 で、どうなったの。何だか迷ってるとか言ってた絵は。

美緒が口を開こうとした時、アトリエから出て来るるり。振り袖姿。

美緒 : どうしたの。七五三？

るり 怒るよ。

美緒 ごめん。ついさつき、その神社で晴れ着の子供見かけたもんだから。

るり ああ、疲れた。コーヒー？ありがたいね。

千重 今日は特別。これが最後の豆。

美緒 るりさんのお祝いだっただか。

早苗 何の？

るり 何でもないよ。親が一度でいいから着て見せろってうるさくて。歌舞伎に引っ張ってかれて、あまり

に眠くて途中で脱け出して来た…。

千重 そこを弓ちゃんにとつつかまっちゃまったと。

アトリエから出て来る弓子。

弓子 もう少しなんやから。

美緒 まあ、これなら、弓ちゃんじゃなくても絵心はそそられるよね。

るり 巨大な昆虫が着物着て、何が面白いのよ。

美緒 自分で言わなくても。

千重 綺麗よ。るりさん。

早苗 ほんと。お綺麗。

るり おだてたつて駄目。もう限界。

帯をほどこうとするるり。あわてて止める一同。

千重 どうするの。裸で帰る気かい。

美緒 いいじゃない。弓ちゃんでも千重さんのも、何か貸してあげれば。…あ、無理か。

るり もう…。今時こんな格好したら、何言われるかわかったもんじやないって言ったのに、全くあの頑

固親父は。

早苗 綺麗なお着物。

るり 死んだ母親が、日本に初めて来た時に、親父に買ってもらったんだとき。青い目のイギリス女が、こ

んなもの着て外を歩けないって、ずっとしまつてあつたのを、何も今更娘に着せなくても。

美緒 お父上の夢だったんだ。親孝行できてよかったじゃない。

早苗 お母さまは、イギリスの方だったんですね。

千重 貿易の仕事で英国に行ったお父上が、向こうの大きな農園の令嬢と知り合って、大恋愛の末に日本に連れて帰って来たんだって。

るり 千重さん、話作ってる。

美緒 何か、あったよね。：鷗外の「舞姫」？

千重 ドイツ娘は悲恋。こちらは、幸福な結婚だよ。

るり まあ、うちの親父は、鷗外よりは誠実だったってわけだけど。

コーヒーをカップに分け、皆に渡す千重。受け取るるり、カップに口をつける。

千重 で、るりさん、今日はお見合い？

飲みかけたコーヒーを吹き出するり。

千重 ちよつと！着物が！

あわてて手拭いでるりの着物の袖口を拭いてやる千重。

早苗 え？じゃ、歌舞伎って？脱け出してきたのはお見合い？

美緒 そうか。親孝行のつもりが、まんまと親にはめられた。

早苗 でも、一応お見合いはしたんでしょ？

美緒 親父さんの顔を立てて？ご大家の一人娘は大変。

ソファに坐り、コーヒーを飲む。ため息をつく。

るり …医者に向いてないんじゃないか…って。

るりを見つめる一同。

るり …自信がない。このまま卒業して本当に医者になれるのかな…って。

美緒 るり先生らしくないこと言うじゃない。

るり 私のこと、何だと思ってる？

美緒 天下無敵の怖いもの知らず。

るり そんなわけないでしょ。私だって悩むの。

間。

るり お前みたいな目立つ大女は、手に職をつけて自立しろって、さんざん言っときながら、今になって、結婚しろ、女は家庭に入って、立派に子供を育てるといふ使命があるんだとか言い出して。シナとの戦争

は終わりそうにないし、アメリカやイギリスとの関係も悪化で、これからますます厳しい時代になる。若い男は皆戦地に行って町から消えてしまうかshれない。その時になって、考え直しても遅い。そう言われると、もうどうしていいか。

美緒 逃げるんだ。

美緒を見る千重とるり。

美緒 医者になる自信がないから、親の勧めた相手と結婚して、家庭に納まろうなんて、逃げでしょ。ずるい。るりさん、見損なつた。

るり そんなこと言つてない。

美緒 そう聞こえたよ。(早苗に) ねえ。

早苗 え。あ、：はい。まあ。

美緒 第一、早苗さんに失礼じゃない？今の話。

早苗 いえ。

るり それは、ちよつと違ふんだけど。

美緒 違わないよ。そういうことなの。

るり 美緒ちゃんこそ。

美緒 私が何。

るり 親の言いなりになるのが嫌で、絵を描いてる。親の勧める相手と結婚したくないから、絵を言い訳に

してる。それこそ、逃げてるんじゃないの？

憤慨して何か言おうとする美緒より先に、口を開く早苗。

早苗 よかった。：私一人おいてきぼりみたいな気分でしたけど、みんなおんなじなんだな…って。ちよつと安心しました。

複雑な表情の一同。

千重 みんなどうしたの。早口過ぎて読み切れやしない。

るり 女はつらいよねって話。

千重 何を今更。2600年前から、そんなこと決まってるだろ。

美緒 神武天皇までさかのぼるの？ばかばかしい。弓ちゃん。

弓子 え？はい。

美緒 話、聞いてた？

弓子 いえ。何かようわからんから。今ちよつとこの着物の色味をどうしようかと。

美緒 この子にだけは関係なさそうよ。男も女も、時代も。

弓子 るりさん、もう一回坐ってみて。

るり いや。もう御免よ。一刻も早く脱ぎたい。

帯締めをほどき始めるるり。

千重 とにかくその染みをとらなきゃ。あ、樋村のセーターでも着てて。何とかしてあげる。
るり そうだ。おじさんの服があった！（千重に）ありがとう。ついでにズボンも。
千重 ズボン？大き過ぎるでしょ。
るり 構わない。ベルトで何とか。コートも貸してもらえると助かる。

千重を促しつつ、帯を半分引きずって奥に消えるるり。

弓子 るりさん！

美緒 無理だね。あの人にモデルは。

しかめっ面をしてアトリエに消える弓子。

美緒 見せて。巨大な昆虫の着物姿。

弓子に続き、アトリエに入る美緒。

一人残る早苗、カウンターに近づき、紙片を探している。
奥から聞こえる楽しそうな笑い声。

奥の部屋とアトリエに気を配りつつ探す早苗。

アトリエから出て来る美緒。ほうつとため息をついて、自分の持って来た風呂敷包みをあけようとして、カウンターの中にいる早苗に気づく。

早苗 あ、コーヒー茶碗を洗おうかと思って。

美緒 いいんじゃない？もう5時よ。ご主人、帰って来るんでしょ。

早苗 あ。そう…ね。じゃ。

アトリエに戻らない美緒。早苗、諦めてショールを肩に掛けて出て行く。

美緒、アトリエから出て来る弓子に、風呂敷包みから取り出した冊子を見せる。

美緒 これ。

弓子 自由新風会。…政治の団体ですか？

美緒 違うって。名前は垢抜けないけど、私たちのグループ。今度、新しい会員を募って、もっと斬新な会にしようってことになったの。ほら、大崎三郎とか、小川康之とか。

弓子 …大崎三郎。るりさんの裸体画の…。

美緒 それを描いたのは日本画の方。こっちは油彩。

弓子 ああ、昆虫専門の。

美緒 そう。彼らが中心になって、今の美術界に殴り込みをかけようって。

弓子 殴るんですか？

美緒 言葉のアヤよ。新しい風を吹かせたいっていう意気込み。

弓子 それで、何で私を。

美緒 今、若い画家はどんどん出征してる。そのうち、大崎や小川にだって赤紙が来る。残るのは年寄りばかり。で、弓ちゃんに白羽の矢が立ったの。今、注目の若手女流画家。耽美的で、自由な発想。他の誰にも真似できない色彩の鮮やかさ。伸びやかな筆致と対照的に細やかな構図。鋭い洞察力に裏打ちされたモチーフの確かさ。

弓子 そんなん、大抵の展覧会入選作に書く批評ですやん。

美緒 褒められてるのよ。素直に喜べば？

弓子 褒められてる気いしません。人が作品をどう見るかなんか、どうでもいい。

美緒 どうでもいいの？

弓子 :どうでもよくはないけど、うまいとか素晴らしいとか、そんなん、信じられへんし。

美緒 疑り深い。

弓子 この絵が好きや:と、そう言われたら、信じますけど。

美緒 めんどくさい子。

弓子 美緒さんも言われてましたやん。さつき。

美緒 私の何倍もめんどくさいわ。弓ちゃんは。

首をかしげる弓子。

美緒 で、どうなの？入ってくれるよね。

弓子 群れるのは嫌いです。

美緒 ……そう言うと思った。

弓子 そやったら、この話はもう。

美緒 そうはいかない。私にも、メンツつてもものがある。みんなに頼まれたからには。

弓子 美緒さんやったら、あかんのですか？

美緒 ……きついこと言ってくれるね。

弓子 何がですか？

美緒 新しい風を吹かそうっていう会の旗振りが森下美緒で、誰が注目する？

弓子 ……ああ。

美緒 そこで納得されるのも、凄く癪だけど、これが現実。そんなこと百も承知だから、こうして、頼んでるんだし。

弓子 私は、好きなもんを好きなように描きたいんです。誰かと一緒に何かをしたいなんて思えんです。

すんませんけど。

美緒 駄目か。やっぱり。

弓子 駄目です。

美緒 弓ちゃんを動かせるのは誰なんだろうね。

弓子 誰でも、嫌なもんは嫌なんで。

美緒 ……シン？

ドキツとして美緒を見る弓子。

美緒 シンの言うことなら聞く？

間。

美緒 去年の「蒼いひと」。…あれ、シンだよね。少年から青年に脱皮しそうな、美しい肖像画。あれで、牧田弓子の名前は一気に広まった。その前に評判になった「サロメ」とは全く違う発想。この子は何者だって、皆が騒いだ。

弓子 描きたいもんが一杯あるんです。綺麗やなと思うたら、すぐに筆を持たんと。さっきのるりさん、早く仕上げたいんで。

アトリエに入ろうとする弓子。

美緒 戦争の絵。

振り向く弓子。

美緒 去年の第一回聖戦美術展に入選したんだ。

弓子 美緒さんの？

うなずく美緒。

美緒 美しいもの、綺麗なもの、そんな題材を、今更私の技術で描いてみたって、誰も振り向きやしない。それなら、いっそ、全く違うものを描いてみようって。

弓子 そんなこと、初めて聞きました。

美緒 言ってなかったから。名前も変えて出したし。

弓子 何で？

美緒 動機が不純でしょ。

弓子 描きたくなかったんですか？

美緒 描こうとは思ったよ。描いてたら、面白かった。戦闘場面なんて思い浮かばなかったから、写真を見て、いろいろ研究してみた。兵隊の動きとか、銃や戦車。戦場を想像して描くのは、…不謹慎だけど、楽しかった。

間。

美緒 怖くなった。戦争を題材にした絵を描いて、楽しめる自分が、怖かった。

間。

美緒 女が描く戦場の絵。受けると思った。…今年の紀元2600年奉祝美術展の公募。
弓子 出したんですか？

首を横に振る美緒。

美緒 描いたけど、出せなかった。もしこれがまた入選したら、もう抜け出せなくなる。それが怖かった。
…そんなことを考える自分が、…心底怖かった。

うつむく美緒。

弓子 …怖いと、あきませんか？

弓子を見る美緒。

弓子 戦争の絵なんか、私には描けません。絶対描く気にはならんと思うけど。美緒さんが…楽しいと感じ
たんやったら、描いたらええんやないですか。それだけのこととちやいますか。

ゆがんだ微笑みを浮かべる美緒。

美緒 は……。弓ちゃんにはかなわない。何をどうやっても。

奥から聞こえる千重とるりの笑い声。

弓子に返された冊子を風呂敷包みに入れる美緒。

店の外、引き返してきた早苗、ドアの前に佇み、中の様子を見ている。

暗転。

2日後の朝。

アトリエから出て来る弓子、上手戸棚から絵具の箱を取り出す。空の箱の山。探すものが見つからず、仕方なく数本の絵具を手にしてアトリエに戻る弓子。

下手。店の前で中を窺っていた早苗、ドアをそっと押し開けて入る。カウンターに忍び込もうとした早苗、急に下から顔を出した千重に驚く。

早苗 わ……。千重さん。…いたんですか。

千重 あ、びっくりした。

早苗、とっさにハンカチをカウンターの隙間に入れる。

早苗 すみません。一昨日、ハンカチを忘れたみたいで。

千重 え？（早苗の口元を見て）ああ。ハンカチ？この辺りは、昨日掃除したけど、見当たらなかつたね。

早苗 千重さん、今日は、体調は？

千重 まあまあ。耳鳴りは諦めてるんだけどね。

早苗 無理しないで休んで下さい。勝手に探しますから。

千重 大丈夫。今日は動きたいんだ。あ、今、洗濯の途中だったんだよ。（手拭いを取り）ちよつと干して来るね。

早苗 ああ、はいはい。どうぞ、ごゆつくり。

手拭いを持って奥に消える千重。

ほつとして、カウンターのの中に入ろうとする早苗。

アトリエから出て来る弓子。がくつと肩を落とす早苗。

弓子 あれ？今、千重さんの声してたけど。ああ、早苗さん。おはようございます。

早苗 おはようございます。千重さんは、今洗濯物干しに行った。

弓子 あ、今日はできるんや。よかった。

早苗 珍しいわね。弓ちゃんがこんな時間に起きてるなんて。

弓子 これから寝るところです。

早苗 でしょうね。また徹夜？

弓子 こないだのるりさんを完成させたかったんやけど、思うような色がのうて、どうやったら、あの色が
出せるか考えてたら、この時間に。

早苗 洗濯やら食事やは、いつも千重さんが？

弓子 はい。

早苗 弓ちゃんは？完全な居候？

弓子 やらんでいいって、言われるんで。

早苗 甘やかされてるんだ。

早苗を見つめる弓子。

早苗 この家って、もう収入はないんじゃない？どうやって食べて行ってると思う？

首をかしげる弓子。

早苗 樋村のおじさんがいなくなつて、統制で食材も手に入らなくなつて喫茶店も閉めて、骨董も殆ど扱え
てない。どこからお金が入って来るの？

弓子 私には…。

早苗 関係ない？そんなことはないよね。ただで食べさせてもらつて、何不自由なく暮らせてる。描きたい
絵を好きだけ画材を使って描ける。いいご身分だわ。

弓子 画材も少なくなってきた。絵具は全然足りんし。

早苗 それを自分で何とかしようとは思わない？

弓子 自分で？

早苗 弓ちゃんの絵って、売れるんでしょ？

弓子 さあ。

早苗 買いたって人がいたら、売るよね。

弓子 ……いるんですか？

早苗 もし、よ。

考えている弓子。

弓子 ……絵で、売ったり買ったりするもんなんかな…って、ずっと思うてて。

早苗 何言ってるの。画廊はそれで成り立ってる。って、言うより、それでなきや、画家は食べていけない。

弓ちゃんだって、そう。ただ描きたい絵を描いてるだけで、三度三度ご飯にありつけるなんて、こんな結構な生活いつまで続くかわかんないでしょ。描いた絵を売って、ううん、売れる絵を描いて、自分の食い扶持を稼ぐべきなんじゃない？

間。

早苗 弓ちゃん、考えが甘いわ。

早苗を見る弓子。

早苗 私みたいに、家事をやってるわけでもない。亭主の世話を焼くこともない。売りもしない絵をただ好きだけ描いてる毎日なんて、この戦時下に許されないことよ。

首をかしげている弓子。

早苗 弓ちゃん、いい加減…。

奥から顔を出す千重。

千重 駄目だね。お天気が怪しい。早苗さん、お宅の洗濯物は？

早苗 …あ。そうですね。

早苗、外を見て、仕方なく引き上げかける。カウンターのハンカチに気づく千重。

千重 あら、これじゃない？忘れ物。

早苗 あ、…すみません。…じゃ、失礼します。

千重 はい。またね。

千重に見送られ、店を出る早苗。

千重 弓ちゃん、早苗さんと何の話してた？

弓子 え？…別に。

ソファに坐る千重。

千重 人がどう思おうと、構やしないからね。

アトリエに入りかけた弓子、足を止める。

千重 あんたは、樋村が見つけてきた宝物だと思ってる。

間。

千重 …シンは、出て行っちゃったけど、…弓ちゃんはいてくれるだろ。ここに。

後ろ向きのまま小さくうなづく弓子。それを目にしていない千重、小さな声で歌い出す。『春の日の花と輝く』。振り向く弓子。

雨の音。薄暗くなる舞台。

3年後。昭和18年。11月。

『ミモザ』店内。

明るい光が射しこんでいる。

鼻歌を歌いつつ、壁に飾りを付けている千重。小さな野花を生けた花瓶をテーブルに飾る。

千重 弓ちゃん！敷布は？

アトリエから白いシートを持って出て来る弓子。

千重 まだ広げないで。みんな揃ってから、パーツとね。いい？

弓子 あ、はい。

千重 今はそこに引っ掛けておいて。

シートを壁に引っ掛ける弓子。

千重　：送別会だっっていうのに、何でこんなにウキウキできるんだらうね。

弓子　早苗さんのこと、嫌いやったんですか？

千重　そういうことじゃなくて。（微笑んで）ま、弓ちゃんにはわからないか。

首をかしげる弓子。

千重　美緒ちゃん、遅いね。

弓子　この頃、すごく忙しそうです。大槻健太郎の秘書。

千重　大槻…って、偽名だろ。最初に描いた戦争の絵の。まだそのまま使ってるのかい。

弓子　はい。資料をいろいろ調べたり、軍人さんから話を聞いたりするのに、その大槻健太郎の秘書を名乗ってるんやそうです。

千重　いつそ女が描いたとわかった方が、絵が売れるんじゃないのかね。

弓子　そうなんですか？

千重　戦争の絵は、大抵男の画家が描いてる。女流画家は、珍しいもの。

弓子　珍しいと売れるんですか。

千重　そういうもんだろ。世間は。

弓子　はあ。

千重　…結局、美緒ちゃんも割り切れないってことか。

間。

千重 弓ちゃんは見たのかい？藤田嗣治の「アツツ島玉砕」。上野で展示されてたっていう。

弓子 はい。こないだ美緒さんに連れて行かれました。

千重 私は、何だか見に行く気になれなかったけど、どうだった？

弓子 凄い絵でした。どう言うたらええんか、…見た人がみんな絵の前で手を合わせてて。

千重 手を？

弓子 兵隊さん達が、あんな風に戦地で凄まじい戦いをして散っていったんやと思たら、もうただ手を合わせるしかないという感じで…。

千重 そんなに真に迫ってたのかい。

弓子 最初はただ寒気がしました。怖うて、心臓がドキドキするくらい…。けど、…絵の端っこに小さく描かれた紫の野の花が、綺麗で…。

千重 花？

弓子 はい。下の方に、ほんの爪の先ほどの。あれで、絵全体が違って見えました。

千重 美緒ちゃんは、何て？

弓子 何も言うてはりませんでした。帰り道も黙ったまんまで。

千重 弓ちゃんは、描かないのかい？

間。

千重 戦争記録画。前から美緒ちゃんに勧められてたんだろ。

弓子 (首を横に振り) 藤田画伯ほどの腕があったら…。普通のもんは、生半可な覚悟では綺麗な絵にはできません。

千重 あまり綺麗にこだわっていると、お上から睨まれないかね。

間。

千重 この間美緒ちゃんが言ってたけど、弓ちゃんは日本の古典的な題材も描かず、戦争協力画にも見向きもしないから、問題の画家として見られ始めてるって。選ぶ主題が西洋画風過ぎて、時局に反してるって。

大丈夫なのかい？

弓子 絵は戦争してませんから。

千重 でも、それで画材が手に入らなくなったら。うちの在庫ももう底ついてるし。

弓子 キャンバスが足らんようになったら、裏に描きます。絵具がなくなったら、また草や花の汁でも絞って、新聞紙にでも描きます。

はつとする千重。

花瓶の花を見つめていた弓子、アトリエから反故紙を持ってきて、スケッチを始める。

ドアを開けて入って来る美緒と早苗。

美緒 ああ、寒い寒い。まだ11月だつてのに、風が冷たい。

千重 おや。ふたり揃つてお出ました。

早苗 そこで会つたんです。今日は、すみません。

千重 何言つてるのさ。入つて。送別会つたつて、何もないんだよ。すまないのはこっち。
早苗 これ、少しですけど。

早苗から渡された包みを開ける千重。のぞき込む美緒。

千重 お饅頭！

早苗 本当に少しですけど、宅が知り合いから分けてもらったものを。人数分はないので。

美緒 そりやもう、きつちり測つて切り分けなきゃ。

千重 悪いわね。送別される人から、こんな貴重なものを。

早苗 いえ。たまたま宅の仕事の関係で。

千重 今までも、いろいろ融通してもらつて、ほんと助かつてた。

美緒 もう、おもちも、大豆も、もらえなくなつちやうんだ。

早苗 すみません。：本当にお名残り惜しいです。

千重 ：満州に行つても体に気をつけて。

美緒 どこだつて。奉天？

千重 ハルピン。寒いんだろうね。かなり北の方だから。

早苗 みたいですね。

千重 ご主人の転勤じゃ仕方ないけど。

弓子、皆の方を気にも留めず、絵を描いている。

弓子に近づく早苗。

早苗 弓ちゃん、以前言ってた話だけど。

美緒 え？何？

早苗 実は、宅の上司だった人が、弓ちゃんの絵をとてても気に入っていて。

美緒 そうなの？

早苗 今までにも三沢画廊から何枚か買ってるらしいの。牧田弓子はいって、大のご贖戻さん。私の友達だつて言ったら、びつくりされて。

美緒 そりゃそうなるわね。

早苗 ぜひ買い占めたい、全作品、自分の手元に置きたいっておっしゃって。

美緒 凄い。このご時世に、よくそんな。

早苗 …その代わりに、条件があつて。

早苗を見る一同。

早苗 他の誰にも売らないで欲しい。これからもずっと。

美緒 え？

早苗 その、展覧会に出すとか、人の目に触れるようなことはしないでほしいって仰るの。

美緒 どういうこと？

早苗 私にもわからないんだけど、宅が言うには、とても独占欲の強い収集家らしくて、以前にも、気に入った画家の作品を買い占めようとしてひと悶着あった人なんですって。

美緒 つまり、人目から遠ざけて値打ちを吊り上げようって？ それができるって、よほどのお金持ち？あ、

そうか、そちら、軍需産業の大手だもんね。

早苗 そんなことは。

美緒 さあ、どうする？弓ちゃん。

ぼんやりしていた弓子、はっと我に返ったように美緒を見る。

弓子 え？

美緒 やめといた方がいいよ。

美緒を見る一同。

美緒 他の誰にも売るな、展覧会にも出すな。…たぶん、牧田弓子の絵はその人の家の中だけに飾られて、

蔵に入れられて、殆ど他の人の目に触れることがなくなる。たった一人の人の所有物になって、ずっとそのまま。まるで日陰者。

間。

美緒 絵は、それで幸せ？

考えている弓子。

美緒 絵は何のために存在する？

弓子 何のため…。

美緒 人に見てもらうため。多くの人の心に何かを残すため。誰にも知られず、見られることもなく、隠され続けるなんて、絵の意味がない。

弓子 …前はそう思うてました。…けど、違うかなて。絵に意味なんか、元々ないんやないか…て…。

間。

弓子 私は、描きたいから描いてる。描きたいものを描く。それだけです。

美緒 弓ちゃんはそうかもしれない。だけど、この時代それが許されなくなってるの。

弓子 誰が許さんのですか。

美緒 だから、それは。

弓子 許さんのは自分だけです。

美緒 …… だったら、自分から描く？ 時局の求める絵を。 戦意高揚の絵を。

弓子 いやです、あんな醜いもんは死んでも描きたくない。

美緒 言ってくれるね。 だけど、もうそんな悠長なこと言ってもらえないのよ。

間。

美緒 前衛的な抽象画を描くグループは、とつくに特高に目を付けられてる。ロマン的な絵を描けば軟弱だ、時局に逆らっていると罵られる。日本画の女流画家たちでさえ、絵筆でお国にご奉公しなければって動きになってる。弓ちゃんみたいに名前の売れ始めた写真洋画の画家なら、必ずそれが求められる。今みたいな、頑なな態度だと絶対に批判される。本気で自分の描きたい絵を描いて、それを世間に出すためにほんの少し我慢すればいいだけ。…一枚でもいい。一枚、例えば少年兵を見送る母とか、言い訳になるような絵を…。

首を横に振る弓子。

美緒 本当に、絵具が手に入らなくなるよ。 いいの？

うなずく弓子。ため息をつく美緒。

美緒 わかった。じゃ、もう私も融通はつけられないからね。

微笑む弓子。

早苗 美緒ちゃんは。

美緒 …決めたよ。本名で描く。

美緒を見る一同。

美緒 女だから甘く見られる、女だから、珍しがられる。そう思い込んでた自分が間違ってた。戦争を題材にした絵は今、沢山の人から求められてる。私にできるのは、それを描くこと。それを一人でも多くの人に見てもらおう。正々堂々と本名で展覧会に出して、人の気持ちを揺さぶる。女だから、赤紙の来ない女だからこそできる。私は、この手で、絵筆一本でお国のために戦う。あのフジタみたいに。

弓子、薄ら笑いを浮かべるが、誰もそれに気づかない。

千重 みんなさつきから、何を言ってるの？早くてよく読み取れないんだけど。

早苗 …心の、自由の話です。…たぶん。

千重 自由なんて言葉、大きな声で言ったら厄介なことになるんだろ。全く不自由だよね。

笑みを浮かべる早苗。弓子、早苗の前に行く。

弓子 その人に伝えて下さい。よろしくお願いします。

弓子を見る一同。

早苗 え。はい。…いいのね？

弓子 はい。

早苗 弓ちゃん、前に絵は売ったり買ったりするものじゃないって言ってたけど。

弓子 はい。

早苗 (かすかに微笑んで) いいのね。本当に。

弓子 はい。

早苗 三沢画廊を通さないで、直に売ってもらえるのね。

弓子 細かいことはわかりませんが。

美緒 三沢さんは弓ちゃんのこと、高く買ってくれてる。不義理になるんじゃないの。

弓子 最近、もう少し違う絵を描いてほしいって言われます。この間のオンディーヌは返されました。

美緒 え。：そうか。そりやそうだわね。あれは、ちよつと。

弓子 (早苗に) ただ、描きたい絵だけを描く。それは守らせて下さい。誰がどう見ようと関係ない。自分が描きたい絵を描く。それを見るのがたったひとりでも、大勢でも関係ない。どこに置かれても、絵はただの絵としてそこにあるだけです。

弓子を見つめる美緒。

入って来るるり。沈んだ面持ちでソファに坐り込む。

千重 るりさん。遅かったね。

るり あ、ごめんなさい。ちよつと仕事が忙しくて。先に始めていてくれればよかったのに。

早苗 私も、ついさつき来たところで。

るり あ、この度は、どうも。ご栄転おめでとございます。

早苗 栄転かどうかは。お世話になりました。

るり ハルピン：？

早苗 はい。

るり ：そうだったよね。

早苗 何か？

るり あ、ううん。

千重 るりさん、お疲れみたいだね。

るり 仕事がね、ほんと。無茶苦茶忙しくて。何しろ同僚の医者が次から次に戦地に行っちゃうもんだから、こっちは大変。夜遅く家に帰って、仮眠しててもすぐに呼び出される。

美緒 女医の値打ちが上がるよね。

るり 普通の女医ならね。

るりを見る一同。

るり さつきも言われたよ。―何だよ、こいつは。俺は、腹が痛くて病院に来たんだ。こんなバケモンみたいな敵国の女に腹見られるくらいなら死んだ方がましだ。

沈黙する一同。

るり こんななりだから、人一倍働いて、日本人だ…って、国のために働いてるんだ…って、そう認めてもらおうと思つて。…それでも、そんなことを言われる。

千重 バカなオヤジは放つときな。言いたい奴つてのは、誰にでもそういうこと言うんだ。

驚いて千重を見る一同。

早苗 私だって、言われてます。結婚して2年も経つのに、子供もできない。こんな体で、何もお国のため

に働けない役立たずだつて。

千重 産めよ殖やせよ、か。殖やして育てて戦地に取られて死なれちゃ、女はたまつたもんじゃないさ。

千重を見る一同。

美緒 そんなこと大きな声で言ったら、ほんとにここ潰されちゃうよ。千重さん。

千重 何だつて？こちとら、何も聴こえないんだ。誰の言うことも耳に入らなきゃ強いもんさ。第一、潰そうにも、もう店もやってないんだから。そんなことより、弓ちゃん。

弓子、千重の合図に、はっと気づいたように、壁に引っ掛けた白い敷布を引っ張る。

つぎはぎだらけの布一杯に描かれた文字と、デザイン化された花の絵。『早苗さん お元気で
ありがとう』

拍手する一同。それを見て感激する早苗。

早苗 ありがとうございます。これ、：弓ちゃんが？

美緒 この子の得意技だからね。私の出番はなし。

千重 さ、今日は、嫌なこと全部忘れて、パーっと食べて飲みましょう。と言つたつて、何も無いけどね。
美緒 あるじゃない。とっておきのお持たせ。

るり 何？

美緒 お饅頭。早苗さんから。

るり それは凄い。

美緒 千重さん、公平にね。

千重、定規を取り出して饅頭の径を測り出す。千重の周りに集まる一同。その輪から抜け出するり。気持ち悪そうに、一人離れてソファに坐る。それに気づく美緒、るりの隣に坐る。

美緒 まさかとは思うけど。：おめでたとか？

るり は？あり得ない。やめてよ。ただ胃が悪いの。今、食べ物見たくない気分。

美緒 やっぱり。

るり 違うってば。：嫌な話を聞いちゃったんだ。

美緒 何？

るり、言い淀んで、声をひそめる。

るり 千重さんは、見てない？

美緒、カウンターの方を振り向いて確かめ、うなづく。

るり …ハルピンから、体調崩して帰って来た同僚がいて。
美緒 ハルピン？

るり 正確にはその郊外、平房（ピンファン）ってところ。関東軍防疫給水部。…研究所みたいな施設があるって。

美緒 ふーん。

るり …駄目だ。機密事項。

口をつぐむるり。

美緒 何よ、言いかけておいて。その施設が何なの？

るり …敵の捕虜を収容してる。

美緒 研究施設に？

るり …そこに、シンが。

美緒 え？

るり そこに、あの歌を歌う、優しい青年がいたって。

美緒 あの歌って。

るり 『春の日の花と輝く』

美緒 ああ。え？

大きな声を出しかけて口をふさぐ美緒。

カウンターの中で、切り分けた饅頭や芋を皿に移して大騒ぎをしている千重、早苗、弓子。

美緒 でも、どうして、シンだって。その同僚の先生はシンを知ってたの？

るり 昔、一度だけ彼をここに連れて来たことがある。印象的な青年だって言ってたから記憶にあったのかも。私もしょっちゅう、あの歌を口ずさんでたから、彼も覚えてたし。

美緒 彼…。

るり それはいいから。とにかく、あんな歌を歌う支那人なんて珍しい。昔日本にいたことがあったらしく、

音楽や美術に詳しい。たおやかで美しい青年だ…と。

美緒 …支那人？…歌う？

るり 美緒ちゃん、何も気づいてなかった？

美緒 え？…シンが？

るり 発音を見破られないように、口がきけないふりをしてたの。

美緒 えーっ？

るり 抗日運動をしていた上海で捕まったらしい。風貌とは裏腹に、絶対口を割らない筋金入りのゲリラ。

…でなきや、あんな所に連れて来られない。

美緒 シンが抗日運動？上海で？

るり 動かない指で、ピアノを弾く仕草をしてたって。…間違いない。シンだ。

美緒 動かない指？ケガしてたの？

るり　…凍傷。…その施設では、捕虜を使ってそういう実験を…。

背後にいる弓子、皿を落としそうになる。驚いて皿を受け取る美緒。
カウンターのなかから声をかける早苗。

早苗　大丈夫だった？

美緒　あ、うん。

千重　それ落としたら、もうないからね。

美緒　はい。

弓子、美緒とるりの間に割って入る。

弓子　シン？シンさんがいたんですか？どこに？

るり　（弓子を遮り）しっ。

弓子　どこにいたんです。

美緒　ハルピンの近くだって。

弓子　ハルピン…。

早苗の方を見る弓子。

るり 弓ちゃん。無理だからね。絶対会えないから。

弓子 どうして。早苗さんについて一緒に満州に行けば。

るり だから、駄目。どうあがいても無理。部外者は近づくこともできない。第一、シンは、たぶんもう…。

るりを見つめる弓子と美緒。

るり あそこに入れられたら、絶対生きて出られない、そういう所。

美緒 どういう…。

るり 言えない。口に出せない。考えるだけでおぞましい。この世の地獄…。

呆然とする弓子。

カウンターから出て来る千重と早苗、切り分けた饅頭を美味しそうに、口に入れる。

千重 食べるのは一瞬だ。

早苗 だからおいしいんですよ。

美緒達を見る千重。あわてて饅頭を口に放り込む美緒、るり、弓子。

千重 元気でね。早苗さん。

早苗 ありがとうございます。本当に。皆さんのお仲間に入れて頂けて、私、幸せでした。

千重 お便り待ってるからね。

早苗 ええ。書きます。皆さんに。必ず。

千重 ここにくれたら、みんなで回し読みできるから。切手の節約。

笑う早苗と千重。

千重 ……こういう時、シンのピアノが。

顔を曇らせる早苗。どきりとする美緒、るり、弓子。

千重 ……私には聴こえるんだ。

美緒 え？

千重 こうして目を閉じて耳をすますとね。いつものうるさい耳鳴りが消えて、あの子のピアノの音色だけが響き出すんだよ。

『春の日の花と輝く』を歌い出す千重。

声を合わせる早苗。

どこからか聞こえて来るピアノの音色。

歌い始める美緒、弓子、るり。

一瞬明るく輝く光。

次の瞬間、強烈な爆発音。空襲警報の音。

暗くなる周囲。光を背後に受けながら、遠くを見つめ歌っている一同。
暗転。

平成元年。春。

荒れ果てた『ミモザ』の外観。

下手から歩いて来るスーツ姿の真裕美、店の前に立ち、驚く。

真裕美 うっわ。ここ？

時計を見ながら、上手からやって来る大柄な老女、るり。真裕美の前で立ち止まる。
びくつとして、後ずさる真裕美。

るり 新庄真裕美さん？

真裕美 あ、は、はい。

るり 時間通りね。神谷るりです。

真裕美 あ、新庄です。今日は、わざわざお越し頂いて、ありがとうございます。
るり これでもね、まだ医者をやってますので。

真裕美 はい。お忙しいのにすみません。

るり 美緒ちゃんの娘さん。

真裕美 はい。母が生前お世話に。

るり お世話したのは、44年前まで。終戦の翌年に美緒ちゃんが北海道に行ってしまったてからは全く会ってなかった。最近までお元気だったとも、全く知らなかったし。

真裕美 年賀状も差し上げてなかったのに、よく。

るり それはこちらと同じ。あなたこそ、よく私のことを。

真裕美 神谷先生がお勤めだった関東女子医科大学付属病院の名前は、母がよく口にしていましたので、そこから連絡先を。

るり それは、どうも。お母さんは、私のこと、なんて？

真裕美 いろいろお世話になったと。

るり お世話ね。大きなお世話もあったかも。

真裕美 大きな方だと言っていました。

るり この図体じゃ、小さいとは言えないわね。

真裕美 いえ。人として大きな方だったと。

るり そりやどうも。生きてる美緒ちゃんの口から聞きたかったわね。

真裕美 すみません。

るり あなた、真裕美さん？お父さん似？

真裕美 さあ、どうですか。父は、私が小学生の時に亡くなったので、あまり記憶になくて。

るり そうか。美緒ちゃんも、苦勞したんだ。

真裕美 絵だけは諦めなかったって、いつも言っていました。

るり 函館で、挿絵とか、デザインの仕事をしてたって？

真裕美 はい。でも、母がやりたかったのは、やっぱり油絵の方で。北海道の自然を描くのがライフワークだと言って、グループ展とかをやってたし、そっちの仲間もいて。

るり それで、個展をしようって思い立ったの？親孝行。

真裕美 家には風景画や静物画は何点もあったんですけど。今回、…戦争画を描いていたと、連絡が来た宇津木さんから聞かされて。

るり そう。

真裕美 そんな話は聞いたこともなかったし、仲間の画家達も知らなかったみたいで、正直びっくりしました。そのころお付き合いのあった神谷先生なら、何かご存知かと。

るり お母さん、戦争中のことは？

真裕美 あまり話しませんでした。東京の実家が空襲で焼けて、北海道に移り住んでから、自分の人生が始まったって言ってたので。

るり あなたは？戦争画について、どう思ってる？

真裕美 よくわかりません。そういう視点で考えたことがなくて。だから知りたいと思ってます。母が、ど

ういう思いで、戦争を描いたのか。

るり ま、中に入りましょうか。その、宇…。

真裕美 宇津木早苗さん。

るり そう、早苗さん。懐かしい名前。

真裕美 その方が、ここを指定されたので。

るり 知ってたのね。早苗さん。こんな店がまだ残ってたって。

真裕美 何度か代変わりして飲食店が入ってたらいいんですけど、この数年空き店舗になって、結局来月取り壊されるんだそうです。

るり そうなの？まあ、昭和も終わったことだし、これじゃね。

真裕美 入って大丈夫でしょうか？

ドアの取っ手に手を掛けるるり。

るり ドアをあけたとたん…、（大声で）ガラガラっと崩れて！

あわてて後ろに下がる真裕美。

るり 年寄りを見捨てるの？やっぱり美緒ちゃんの娘だ。

真裕美 あ、おどかさないで下さいっ！

笑みを浮かべ、ドアを開けるるり。

おそろおそろ後について行く真裕美。

荒れ果てた室内にドアからの光が射し込む。

蜘蛛の巣を払いのけて、奥に進むるり、ぎよっとして、後ずさる。
部屋の隅に置かれたソファにうづくまる人影がゆっくり動く。

るり …早苗さん？

立ち上がりかけてよろける老女・早苗。やつれてみすぼらしい身なり。

早苗 …るりさん？

るり お久しぶり。

早苗 本当に。ずいぶんご無沙汰しました。

るり あの送別会以来…よね。

うなずく早苗。

るり 老けたね。お互い。

微笑み合う2人。

真裕美 あ、あの、新庄真裕美です。先日は、お手紙ありがとうございました。

早苗 …あの頃的美緒ちゃんよりも年上なのね。

真裕美 昭和18年なら、…母は、20代前半ですね。

早苗 突然の連絡でびっくりした？

真裕美 あ、はい。宇津木さんのお名前は、お聞きしたことがなかったの。

早苗 胡散臭い奴が、母親の過去をほじくり出そうとしている。で、身元のはっきりしたお医者さんに同行してもらった。

真裕美 そんなことは。

早苗 慣れてますよ。そういう扱いは。いつも一段下に見られてた。この人たちだって、内心では、私の事信用してなかった。

るり そんなこと思ってたの？

早苗 そうだったでしょ？2人とも良家のお嬢さん。うわべでは仲良くしてくれたけど、友達だなんて思っ
てなかった。千重さんと弓ちゃん、私と似たような境遇だったけど。だから、あの2人は、私の事警戒
してた。こいつ、何で仲間に入ろうとしに来たんだって。

るり 年取って僻みっぽくなったね。早苗さん。

早苗 (真裕美に) 現に、あなたは、宇津木早苗なんて名前、お母さんから聞いたことがなかったんですよ。

この神谷るり先生のことは知っていたのに。

真裕美 あ、でも、神谷先生は、その、とってもインパクトがあるから、それで。
るり 何だい、それ。

真裕美 あ、すみません。

るり 私みたいに所属がはっきりしてる人間は捜しやすかったのよ。

早苗 私は、みんなの消息を自力で調べましたよ。ずいぶん苦労して。

るり 早苗さんは、ハルピンにいたから、終戦で連絡の取りようがなかったんじゃないの。

早苗 そう。何度も死ぬ思いをしながら引き揚げて来て、大変な目に遭いましたよ。

るり で、今頃、どうして美緒ちゃんの娘さんに手紙を？

早苗 牧田弓子。あの子の絵を集めてるんですよ。

るり 弓ちゃんは、空襲で千重さんと一緒に亡くなったって。

早苗 絵は残ってるはず。

るり そうだよね。確かあの頃、あんたが、知り合いの収集家に紹介して、全部買い取ってもらってた。今もあるの？

早苗 全部見つけました。それに関しちや、私はみんなに感謝されてもいいと思いますよ。

るり そうね。弓ちゃんの絵にとっては、幸運だったね。

早苗 あの絵さえ、見つければ、完璧なんだ。

るり 何の絵？

早苗 「蒼いひと」。シンを描いた絵ですよ。

どきつとするるり。

早苗 あれは、弓ちゃんが最後まで手放さなかったと聞きました。

るり 空襲と一緒に焼けてしまったんじゃないの。

早苗 2人は出先で空襲に遭った。この店は無事だったから、絵はここに残ってたはず。ひよつとして、るり先生が。

るり お生憎。私は、あの頃目の回る忙しさで、ここに来る余裕なんてなかった。何しろ毎日瀕死の人たちと向き合って生きてたんだから。戦後は、家が進駐軍に接收されて、生活も一変。美緒ちゃんが北海道に行くと言うから最後に上野で会った時も、仕事は山積みで、一時間で病院に戻らなきゃならなかった。我ながら、よく体が持ったと思うわ。

早苗 るり先生にも、苦労はあったってことね。

るり 当たり前よ。あの頃、何不自由なく生きてた人なんていたとは思えない。

早苗 いましたよ。そういう人達がいたから、私達がひどい目に遭ったんじゃないですか。弓ちゃんや私は、その犠牲の最たるものですよ。

るり そういうところが、早苗さんと弓ちゃんの違いね。

早苗 どういうこと？

微笑んで、口をつぐむるり。

早苗 ほら、やっぱり、見下してる。さすがるり先生だ。変わってない。

場を取りなすように口をはさむ真裕美。

真裕美 あの手、牧田弓子さんのお話は聞いたことがあります。最近ちょっと話題になってますよね。昔、ライバルだったって、母が言ってたことが。

るり 美緒ちゃん、見栄張ったね。悪いけど、あの頃、弓ちゃんは美緒ちゃんの相手じゃなかったよ。

真裕美 …ですよね。この間、雑誌に載ってた絵を見て思いました。あの時代に、よくあんな着想の絵を、女性が。

早苗 サロメ？

真裕美 はい。幻想的でエロティックで、だれどこかに透明感があって。あれはあの時代の他の画家にはない色使いです。…あ、私、出版社で美術雑誌の編集助手をしてるので。

るり いい娘を持ったんだ。美緒ちゃん。

早苗 ライバルなんて言ってたんなら、ひよつとしてあの絵は、美緒ちゃんが。

真裕美 …家にはありません。母の個展を思いついてから、いろいろ探しましたが、牧田弓子さんの絵は一枚も。

るり 誰が言い出しっぺか知らないけど、最近急に牧田弓子の名前が出て来た。今、あれをそろえて出したら、世間はあつと驚く…。早苗さんの一人勝ち？儲かるわね。

るりを睨む早苗。

るり　いくら何でも、あの頃からそんなつもりだったとは思ってないよ。もともと早苗さん、絵にそれほど興味なかったんじゃない。

早苗　ここで、教えられたんですよ。みんなに。絵も、音楽も、教養つてものを。

部屋中を見回す早苗。

早苗　：何の取柄もない、足の悪い、貧しい農家の娘が、年の離れた男の嫁になって、子供もできず、何の希望も持てない。ふと出かけた喫茶店で、声をかけてもらって、出入りするうちに、お嬢さんたちの仲間入りをさせてもらえて、いろんなことを知った。女でもできることはある、世界はこんなに広がってるんだって。

るり　で、特高のスパイでも何でもやる気になった？

るりを見る早苗。驚く真裕美。

早苗　：いつから。

るり　あの頃は、わからなかったね。後になって考えると、何か妙だなんて。

早苗　さすがですね。るり先生。

るり　ご主人に言われて？

早苗　最初から、そういう結婚でした。夫婦者だと怪しまれない。町で見聞きしたことは全部主人に報告し

た。そう、まさにご主人様だった。うちの人は。

るり 樋村亮介氏のことを調べ上げて、密告したのも。

早苗 もともと樋村を探るために、この町に住み着いたんですからね。

るり そこから、シンのことも？

早苗 あれは、失敗でしたよ。彼はすばしこかった。あつという間に逃げられちゃった。

るり じゃ、シンが上海で捕まったのは、早苗さんの通報じゃなかったの。

早苗 だったら、今頃こんなところに顔出せるはずないでしょうが。

るり そうか。ちよつと、ほつとした。

早苗 シンのピアノは耳に残ってます。いい音色だったねえ。

るり あんな綺麗な子が731部隊の犠牲になるなんて。

早苗 え？

るり 知らなかった？

小さくうなづく早苗。

るり 皮肉だね。あの頃、あんたは、あの近く、同じハルピンにいたんでしょ。

早苗 そうだったんですか…。

胸を押さえてうづくまる早苗。

るり どうかした？

早苗 この歳になるとさすがにあちこち…。
るり 横になって。

るり、早苗の手を取り、脈を診る。心配そうにのぞき込む真裕美。

るり 病院へは？

早苗 そんな金はありませんよ。牧田弓子の絵が売れたら、るり先生の病院にでも行くか。
るり バカ言っていないで。（真裕美に）救急車を。

真裕美 え、…あ、表に公衆電話が。

るり 至急。心臓だって言って。

真裕美 はい！

飛び出して行く真裕美。

早苗 できる子だね。ほんと、美緒ちゃんの子と思えない。

るり そうね。あんない子を騙しちゃいけないよ。

早苗 そんなことしませんよ。

るり 牧田弓子を担ぎ出すために、森下美緒の戦争画を利用しようとしてない？

笑みを浮かべる早苗。

るり 同じ時代の若い女流画家。一人は時代に迎合して、戦争画を描き、結果自ら埋もれて行った。一人は己の芸術を貫いて、収集家に守られ、今陽の目を見ようとしている。

早苗 いいね。いい展覧会ができますよ。

るり そんなに簡単なこと？

るりを見る早苗。

るり そう仕向けたら、今の人はそう見てしまう。でも、真実は？描いた者の想いは？

早苗 そんなの知ったこっちゃない。

るり そう？弓ちゃんだって、美緒ちゃんだって、あの時代に精一杯画家として生きた。みんな、考え、苦しみ、頑張って生きた。それは、千重さんも、シンも、私も一緒。もちろんあんたもでしょう？早苗さん。

苦しそうに顔を歪める早苗。その手を取るるり。

早苗 …どこかに、ある。きつと、どこかで私たちが待ってる。…あの絵は。

るり シンの？

早苗 あれと、美緒ちゃんの戦争画を並べてみたい。…それを見た今の人達がどう思うのか、聞いてみたい。

あの子、真裕美ちゃんが、何を感じるのか、聞きたい…。

るり もう喋らないで。黙って。

早苗 …そうしたら、私みたいな者の人生も、…少しは意味があったってことに…。

るり 静かにしなさいってば。

早苗 …もう無理ですかね。…ここで、るり先生に看取られる最期なんて、考えてもいませんでしたね。あの頃は。

るり 冗談じゃない。そんな役回り、私はごめんよ。

早苗 …こんな日が来るなんてね…。

『春の日の花と輝く』を口ずさむ早苗。

るり 歌は今度にしなさい。今は黙って。

かすれた声で歌う早苗。

早苗 …ほら、…るり先生も。…歌って…。

るりを促す早苗。しぶしぶ声を合わせるるり。声にならない声で歌う早苗。
中央奥に現れるシン、ピアノを弾き出す。

ドアを開けて入って来る美緒。奥から姿を現す千重と弓子。

一同、声を揃えて歌っている。

窓から差し込む明るい春の陽ざし。

暗転。

現代。

美術館の展示室。

薄暗い中、中央の壁に掛けられた2枚の絵。

その横に立つ、白髪交じりの真裕美。

真裕美 右は、ご覧の通り、中国大陸での戦争を描いた森下美緒の作品です。当時、女性が戦争画を描くことは稀でしたが、森下美緒は、積極的に戦場での日本軍の活躍を描き、当時多くの支持を得ました。一方、左は、同じ時代の女性画家、牧田弓子の、非常に若い頃の作品です。ご存知のように、牧田弓子は、独自の美を追求した孤高の画家です。長い間、ある収集家の手元に置かれて、一般の目に触れることなく、隠れた存在でしたが、昭和の終わりごろから、ぽつぽつと、作品が世に出て来るようになり、一気に人気が出ました。この「蒼いひと」は、最初の「サロメ」に次いで牧田の名前が広く知られるきっかけになった作品ですが、長く所在がわかっていませんでした。去年、ある倉庫から偶然発見され、今回初めて一般に公開される運びとなりました。モデルは彼女の周辺にいた人物と思われませんが、特定されてはいません。

間。

真裕美 森下美緒の戦争画は、一部には知られていましたが、一時男性名で描いていたこともあり、埋もれている作品も多く、今もってその数さえ把握されてはいません。今回の展示も、非常に珍しいことと言えます。そして、この2人の画家が、昭和の10年代後半、親しい交友関係を結んでいたことも、この展示で初めて明らかにされています。

記者の声 すみません。今回、こういう展示を企画された意図をお聞かせ下さい。

咳払いをする真裕美。

真裕美 何故、今、この2人の作品を並べるのか。…それを、皆さんに想像して頂きたかったからなのです。まさに、そのことをこそ。

間。

真裕美 日本が無謀な戦争に向かって行ったあの時代に、2人の画家は、何を想い、何を見つめて絵と向かい合っていたのか、その周囲の人達はどんな思いを抱いて生きていたのか。…昭和平成令和と時代は移り変わりました。…けれど、今もって世界に戦の火種は絶えません。あの頃の深い痛みを胸に刻み付け永遠の平和を信じていたはずのこの国も、今また底が抜けたように戦を避ける道を放棄し始めています。

間

真裕美 過去とは何か。未来とは何か。私達がこの世に在るとは一体どういうことなのか。…それを皆様に
少しでも考えて頂けたら、…多少なりとも美術に携わった者として、…そして、森下美緒の娘として、こ
んなに幸せなことはありません。

光が、一瞬、2枚の絵を照らし出し、消える。

—幕—

引用

「春の日の花と輝く」

アイルランド民謡

作詞 トーマス・ムーア

日本語詞 堀内敬三

「国境の町」

作曲 阿部武雄

作詞 大木惇夫

